

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可(毎月一回一日發行)
昭和十年九月廿日印刷納本
昭和十年十月一日發行

第一卷 第六號



淨土

十
月
號

十
七
二

法然上人鑽仰會發行



信仰讀本

定價 十二錢
送料 二錢

四八〇頁
六頁以上
版製上

中村辨康 著

淨土學部
宗長

出版界の記録を破つた劃期的名著の
増補改訂版近日出來！

本書が發行數ヶ月にして一萬部を賣り盡した近來の記録的名著であることは既に周知の事實である。

信仰への手引きをこれ程明快に、平易に取扱つた書物はかつてなかつたと云つてよい。この書が、出版界の記録を破つたのは決して偶然ではないのだ！

内 容

- | | |
|-----|----------|
| 第一章 | 悟りと救ひ |
| 第二章 | 宗教と人間の望み |
| 第三章 | 信する心持 |
| 第四章 | 信仰の本尊 |
| 第五章 | 信仰を得る迄 |

今回續仰會の手によつて、この良書を更に一般に普及する目的で、著者に乞ふて、更に平易に、その後の著者の思想的擴充による補ひをなし、全般に渡る大改訂を行つた。

雜誌「淨土」に創刊號以來連載せる「一枚起請文講義」の愛讀者はこの書によつて更に著者の信仰論に耳を傾ける必要がある。

發行所 法然上人續仰會 ◇

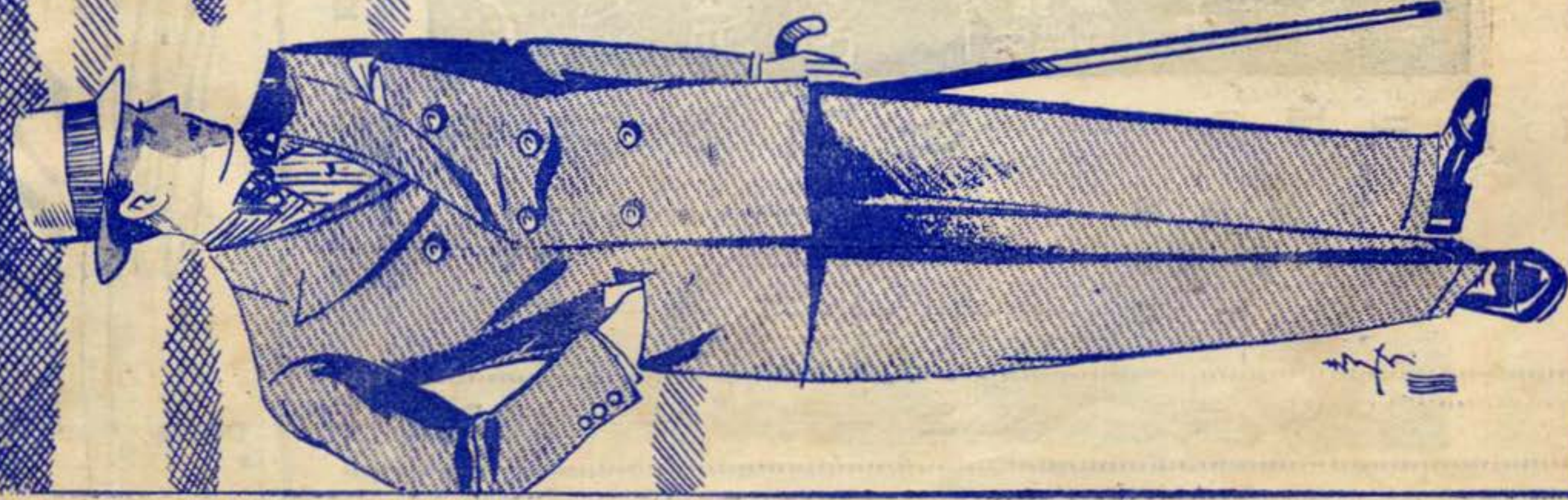
秋の脊廣服

秋冬の新柄生地が内外の
優秀品を蒐めて品揃ひ致
しました御用命の程を



座銀・野上

屋坂松



きん



大正十三年

浄土 十月號 目次

- ・表紙……………井上正春
- ・扉……………ラグーザ・オタマ
- ・目次カット……………青柳喜兵衛

信託講話 現代の行方……………眞野正順(二)

聖典講義 **心の明鏡** 一枚起講 文講義 中村辨康……………(七〇)

秋の話題 古文書十夜物語……………むかしがたりじうやのさまざま 代田重雄(一二)

中國の民間佛教……………釋 不空(二四)

名士に聞く 日本人たる自覺……………頭山 満(二三)

宗教論 人間に酔ふ時代……………佐藤賢順(三四)

信託講話 失業の天才……………鶴田湛泉(二〇)

信仰相談……………(四六)



法話
浄土に往生するとは……………桑田寛随(二七)

特輯よみもの
戲曲
去來の梅……………北林余志子(五二)
小説
二重臉……………長田恒雄(三八)

繪の旅
信州信濃の善光寺……………小野佐世男(三三)

講談
無筆の祐筆……………きたむら・いちろう(四三)

こべ
どい
もい
のち
寓話
英國紳士……………小林かうじ(六六)
童謡
勢至丸さま……………安藤徇之介(六四)
まんが
・シツパイコダヌキ……………(六五)

門十記六
黒谷法然上人傳……………佐藤春夫(二四)

裸足の軍隊……………(五一)
わさび文學……………(二〇)
編輯後記……………(八〇)

自問自答(三八) 金貨は盲目のもの(四〇)
秋の歌(五) 桶に方角はわからぬ(一一)

浄土 十月號 (第一卷 第六號)

淨土宗管長

岩井智海大僧正述

放送

講義



二河白道の話

救ひを得るまで

『慾と怒で固つたこの人間』『この二つでいつもイラ〜と悩みながら暮して行く我々』——この慾と怒を捨て様としては迷ひ、これから逃れやうとしては悩む我々を、迷ひ悩みながら安樂の世界にたどりつかせ様と『二河白道』の譬をもつて平易にお説きになつた——老人でも子供でも解る大説教。

▼これこそ現代の生きた聖典！

〔内容〕：「二河白道とは」：「開かるゝ光明の生活」：「信仰の要」：「陰陽二面の人生」：「火焰の煩惱」：「觀喜光に浴す」：「貪慾の力」：「遙かに觀る白妙の道」：「無有出離の法縁」：「攝取不捨に縋りて」——定價金五拾錢・送六錢。

東京芝公園明照會館内

法然上人鑽仰會

本誌讀者の爲め特に
本會にて取次販賣す

振替東京八二一八七番

世界的出版

國譯一切經

總索引共
壹百五十五卷

◇今年十二月完成

佛教解說大辭典

◇全十二卷今年十月完成

常盤・境野兩博士監修

新編佛教辭典

辭典の界明星

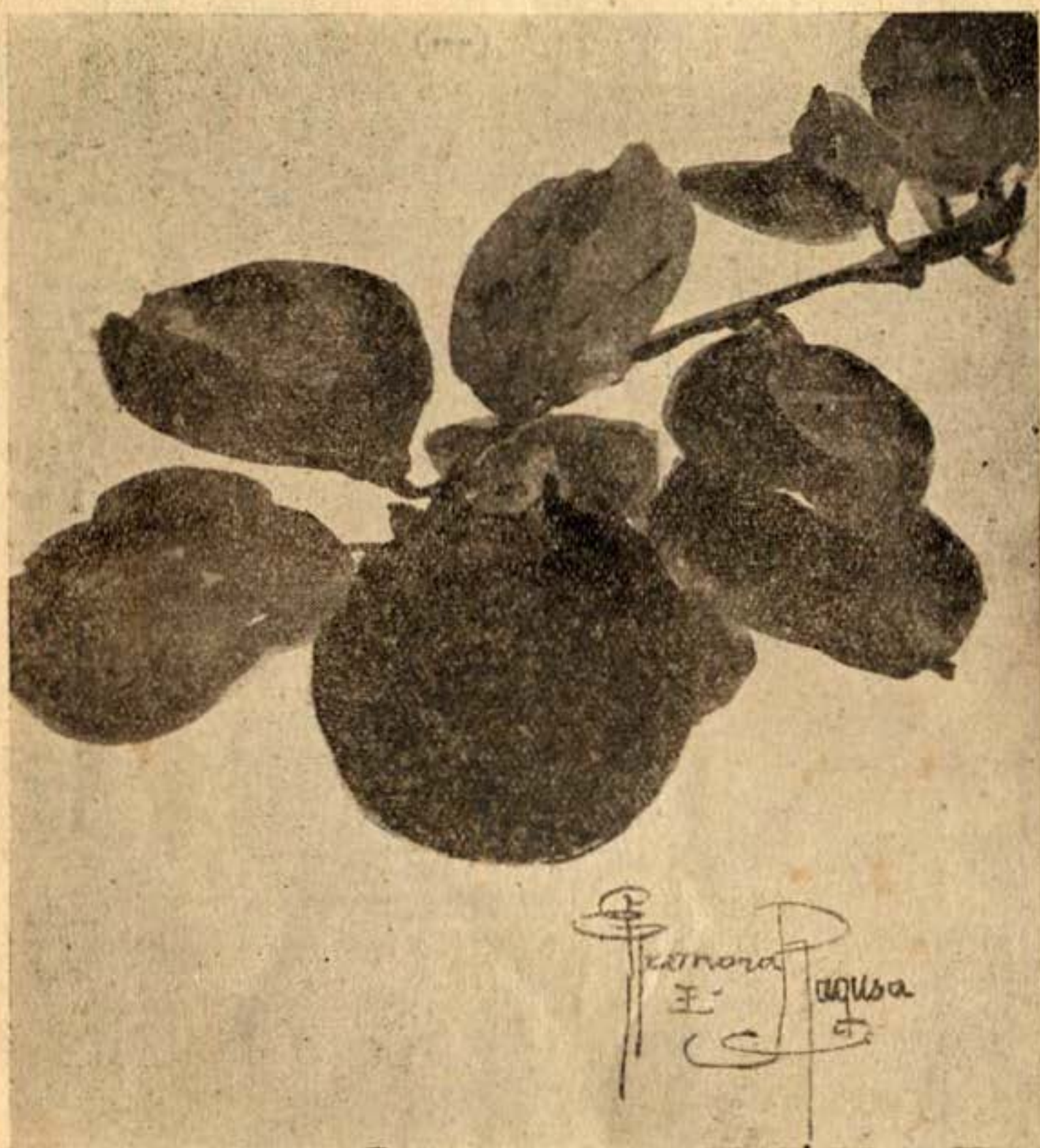
▽採録語數約貳萬・字數壹百拾貳萬・頁數壹千參百▽配列は徹底的な音便で索引なしに樂に引ける▽革製コンサイス型で使用携帯極めて便利。定價は空前の廉價：貳圓五拾錢（送十錢）難解な佛教術語を知るにも、又研究にもよく、大辭典と比適し得る。

東京市芝公園七ノ十

發行所 大東出版社

振替東京一九四七一番

淨土十月號



十夜月

十夜とは十月五日から十四日までの十日間、淨土宗寺院又は宗徒間で廣く行はれる佛事で、阿彌陀佛に對する報恩感謝の儀式であり、十日十夜念佛を唱へて修行するのである。

忘れ得ぬ空も

十夜の泪かな

去來



(一)

現代の行方

眞野 正順

遠く群峯の上に現はれた夏雲は、さまざまの美しい形を青空に書いて、私共の眼を楽しませる。然し、その時、その群峯の背を歩んでゐる登山者達は、その雲の中につままれて、雲の大さも形も譯らず、たゞ漠々たる白霧の中に、迷ひ彷徨つてゐるのである。

そのやうに、人間の時代社會といふものも、それを遠く隔つた後代になつて、是を顧みると、その状態や意義は、はつきりと理解する事が出来るが、事實、その時代の中に生きてゐる者には、却て、漠々たる白雲の中に居るやうに時代の意義も、その前途も見透しがつかぬものである。

現代の我々も亦た、その一つの白雲に包まれてゐるのであるが、我々自らは現在その只中に立つてゐるが故に、却て、その姿も方向もよく分らないで日々を暮らしてゐる。——然し、それにも係らず、時代は黙々として其進むべき方向にぐんぐんと進んで行つてをる。それをよく見極めることが大切な事である。

(二)

現在までの近世社會の特長は、人力を以て自然を克服して、人間の思ひのまゝなる生活を、この地上に出現せしむるにあつた、と云ふ事が出来やう。これが尖端に立つた武器は云ふまでも無く、かの卓越せる科學的發明であつたが

人間の思ひの儘なる世界を作ると云ふことは、やがて、人間の中に潜んでゐる種々の能力を充分に發揮してゆく事ではなければならぬ。

そこで、あらゆる因習的な束縛や、自然的の抵抗を打破つて、人間個人の中にある種々の力や欲望を自由に發揮することが、大切な眼目となつた。

勿論、この時代とても、人間が自身の形成してゐる社會を忘れてゐたのでは無かつたけれども、大切な事は、人間に伏在してゐる能力の自由なる發揮と云ふ事にあつたから勢ひ、個々人の自由が最も大切な事となり、社會と云ふものは、その個々人の欲望と能力とを自由に發揮せしめるための便宜的な存在であると云ふ考が隠に陽に社會の全體を支配してゐた。所謂、個人自由主義の時代と名けられるものがそれである。

ところが、愈そのやうな社會に入つて見ると、社會といふものゝ中にあつて、各人が自由に其欲望、能力を伸ばしてゆく事は不可能であり、結局、弱肉強食的に一部の者のみ文化を享樂し、他の大多數はその重壓の下に、果て知らず呻吟を續けて行かねばならぬ事が明かとなつて來た。

(三)

そこで、其缺陷を補ふために現はれて來たのが、あの社會主義であつた。社會主義の特長は、人間は決して個々の個人として存在してゐるものでなくて、その集まつた社會として存在してゐる、と云ふ事を分明させたところにある。社會から切離して個人だけを考へるのは「惡しき抽象」である。個々人の自由な欲望をのみ重んじ、それを放任しておいても、決して、それは實際社會の中で實際に達せられてゆくものではない。結局、弱肉強食的に、たゞ混亂せる人間生活が無政府的に導き出されて來るのみである。

それ故、個人はむしろ、社會全體の爲に其欲望を制限して行かねばならぬ。社會は全體として是れを眺め、その全體的幸福を増進せしめて行くやうに統制が行はねばならぬ。

このやうな見方から、社會そのものを理論的に研究し、その科學的性質を明かにし、それに隨つて社會の運行に一の統制的軌道を與へて行かうとしたのであつた。この理論的に社會を眺めたこと、それが社會主義の第二の特長で

あつた。ところがこのやうに理論的にのみ社會を眺める事は、やがて次の二つの結果を導いてくる事となつた。

一つは理論は物事をなるたけ一元的に取扱つてしまはうとする傾向を持つてゐるから、人間を、たゞちにその全體人類として考へ、社會の動因と經濟の一元に歸し、全體人類の葛藤をたゞ勞資の對立に於てのみ把えるやうになつた。

二つには、科學的理論は主として、物事を外面的に眺めるから、やがて此考はむしろ極端な唯物論的社會史觀に陥ちてゆき、人間の進展をも、たゞ外面的に、たゞ闘争に於てのみ考へて、他面、闘争をなしつゝ融和しつゝける情意的精神的部面を全く閑却せる、社會變革プログラムを畫くに至つた。

○

この主義理論を打破し其缺陷を暴露したものは、むしろ却て、社會そのものゝ現實であつた事は皮肉であつた。「萬國の勞働者よ、團結せよ」の提唱に眞先に反いて行つたのは、實際勞働に呻吟せる者の群に外ならず、闘争は、その理論が尖銳の度を強めると共に、いよくその場面を縮少

し、遂に内部闘争に終始して事畢つた。——つまり、理論のもつ運命として、抽象に初まり、またその最後を抽象的なる葛藤の中に畢へたのであつた。

(四)

社會主義の停頓に對して、新しく立現はれたのが、現在全世界の各地を風靡してゐる國家主義である。國家主義は少くとも、かの社會主義の抽象的な全人類と云ふ空漠な社會觀から脱して、むしろ、歴史的にこゝに實在せる民族團結を中心として社會協同を企てた點に於て、實に現實的であつた。そうして實に、さきに閑却せられた情意的部面における聯繫を注意した事によつて、より充實した人間觀でもあつた。

それだけ、より善く、人間の現實に適應した運動であつただけに、また現實に於ても、世界を席捲しつゝ各所にその顯著なる結果を産み出してゐる。

然しながら、この現實的な團結、民族を限界として、その社會統制を企てた事は、それだけ現實的であり、より一步を進めたものであつたが、ちやうど、先に、個人が、

個人として獨り存在するものでなく、社會として存在したやうに、民族國家もまたその民族一群だけ、この世界に存在するものでなくて、全人類として存在してゐる事實は抹殺する事は出来ない。そこで、さきに、個人が自由にその欲望能力を伸長しやうとした時、他の人々の存在がそれと

抵觸したやうに、民族も、それが發展のために他の民族と抵觸する。この事によつて、國家主義はその當初の念願であつたその民族社會内部における完全社會實現の努力を閑却して、他民族との闘争に其全力を傾投せざるべからざる趨勢に追はれて來た。目前、急激にその勢を強めて來た各民族の軍備競争、經濟競争の激成がそれである。

であるから、かゝる國家主義に於ける理論は、その中にまた、疑ふべからざる貴重なるものを含みつゝ、然も常に限界狭少である。これを總括して、たゞ己が民族の傳統若しくは血液は、全世界に冠たるものであると云ふを出づる

秋のうた (一)

いりぬべき山もあらねば武蔵野は
つきを見るべき所なるらむ

○

宿のまの雨に木ずゑをあらはせて
しづくに宿るありあけの月

行 誠 上 人

ものは少い。然しながら、かやうな獨り善がりの理論は理論としては通用しない。たゞ、理論に非ざるものによつてのみ強いて通用せしめられ得るものである。即ち、その民族の武力が強大である間のみ、他民族はこの下に服従する底の理論である。

(五)

こゝに靜かに願ひて、人は次のやうな思ひに襲はれないであらうか。

さきの個人自由主義における社會は、個人の欲望能力の自由なる伸長を主張したが爲に、その社會は無政府的な混亂に陥つた。今の國家主義は、各民族の欲望能力の自由なる

伸長を許すことに依つて、恐らく、全世界の無政府的混亂へと導かれるであらうと。こゝに現在の我々の靜思熟慮すべき問題が横はつてゐる。

(六)

顧みて見ると、近世のはじめ、かの個人自由主義の擡頭から、今日の國家主義に至るまで、我々を支配して來た社會思想の上には、一の一貫したるものが常に流れておるのが見られる。

それは、云はゞ、自我的なる人間觀とでも名づける事が出來やうか。それは、人間と云ふものは、こゝにある自己を中心として、出來るだけ外部に自己を擴げてゆき、環境を自己の欲望利益のために驅使してゆく事に、その生存の意義を有すると云ふ見方である。

それは、あの近世科學と共に擡頭した自由主義に於て、最も鮮明な表現が見られる。各個人は其能力を自由に發揮して自己の欲望利益のために、外界を思ひのまゝに驅使してゆく。そこに人間社會の理想が望んだのが此主義であつた。然し、この思想は、個人が外部自然のみならず、社會をも各自の欲望のために自由にせんとする事によつて、社會現實と抵觸し、社會主義の突撃を受ける事となつた。

然るに次に、人間は個人でなくては社會的協同物である。それ故、各人は其全體社會のために各箇の放恣なる自由は制限され統制されねばならぬ、と云ふ主張をもつて立

つた社會主義もやはり先の自我中心的なる見方は繼承された。即ち、こゝに護らるべきものは個人の利益ではなかつたが、階級の欲望利益であつた。即ち、さきの欲望的個人が凝集して階級と云ふ一ブロックを形成したものの利益であつた。プロレタリアはブルジョアを擊破して其利益權力を奪還し、プロレタリア專制の社會を實現するといふこと即ち、それに外ならぬ。

社會主義が破綻し、國家主義の今となつても、人は容易く、この欲望的自我の主體がたゞ、階級より民族へと推移したのみであることを、見誤る事はないであらう。

欲望的自我をすべての中心におき、絶えずその利得の増大をのみ計る人生觀が、司配してゐる間は、絶えず無政府的な鬭争と混亂とのみが現はれて來ねばならぬ。欲望は盲目だからである。

自由主義、國家主義が各他の一面に首肯し得べき長所を有するにも係らず、遂に、全體的混亂へと導かれて來ねばならぬ理由はこゝにある。かの社會主義はかゝる混亂に陥ることなしに比較的統制ある社會進展の道を示した如くに外觀せられたが、その理由はたゞ、全人類を大別して

二階級となし、闘争を局限してたゞこの二階級の間に於てのみ行はんとしたからであるに過ぎぬ。然しながら、それはこの社會現實に對しては單なる抽象的理論であるに過ぎなかつた事は先に述べた如くである。それ故、揚言するが如き全人類の對戦は行はれる日なくして、たゞ其陣營内に於て果てしなき内部闘争が續けられ、そこに醜き司配的欲望の果てしなき混亂を現はして來た。即ち同じ自我的欲望の無政府的混亂が其場所を違へて現はれて來たに過ぎなかつた。

○

このやうに、見來るとき、近世社會諸思想の中に、次々と繰返され來るところの同様なる混亂は、やがて夫等の根底に一樣に横はるところの欲望自我的なる人間觀そのものの缺陷に起因するものであることが氣づかされて來るであらう。そうして其事は、かゝる諸思想の母胎たる歐米民族が、その卓越せる物的文化にも係らず、猶、人間もそのものを内

秋のうた (二)

名月や夜は人住まぬ峰の茶屋
名月や門にさし入る潮がしら
川船やよい茶よい酒よい月夜
塚も動けわが泣く聲は秋の風
秋風や薔も島も不破の關

芭蕉

に省みる精神的部面に於て、未だ足らざる處あるを語るものである。

考へて見るに、自己は決して、この環境外界と獨立して別に存するものではない。この環境、この外界、この社會、この時代と密接に關聯し、むしろ、それ等がこの自己なるものゝ内容を形づくつてゐるのである。この事は次第に無私な氣持になつて——云はゞ科學的な態度に還つて、自己を顧みるならば、それだけ、いよゝ數多くの他の力が精密にうなづかれて來る。

(七)

考へて見るに、人間生存の意義がたゞ夫々の自己の欲望のために、外部を支配しつくして行くことにある爲には、自己と云ふものが外界とは對立した別異な存在でなくてはならない筈である。外界と敵對した別異の存在であればこそ、其短かき生存の中に出來るだけ外界を自己の欲望のために克服して行かねばならぬ。

然るに、靜かに反省して見ると、自己は決して、この環境、外界とは獨立して別に存するものではない。この環境、この社會、この時代と密接に關聯し、むしろ、これ等のものが、却て、この自己なるものゝ内容を形づくつてゐるのが見出されるのである。この事は、冷靜に無私な氣持になつて——言はゞ科學的な態度によつて、自己を顧みるならば、いよく精密に首肯かれて來る。突つめて云へば自己は様々な諸力の關係の上にある一の點である。

この事は少しく嚴肅に眼を自己の周圍に轉じて來る者には、次第に明らかとなつて來ることである。あの自ら科學的たるを自信してゐた社會主義にしても、それが社會の實存に目をつけ、それと其中に棲む人間自己との關係を考へた時、自己の獨立とは、むしろ却つて抽象であつて、實際の自己の一切は社會の動向によつて却て支配されてゐる事を見出し、自己を見んとすれば、むしろ、其社會を見ねばならぬとまで進み入つたのであつた。またこの現代を支配しつゝあるあの國家主義の主張の根據も實に各個人は、歴史的民族を離れて別に存するものではないと云ふ事實に基いておることは、既に普ねく知られておる處であらう。

このやうに、自己なるものは、自己をめぐる環境諸力の關係の上に存するものであるとするならば、それが一生の存在の意義は、決して濫りに、この自己に浮ぶところのものを外部に強制し、或はその放恣なる欲望のために外界を獨占して行く事には存しない事は自から明かとなつて來るであらう。

自己を眞に生かすことは、わが環境を眞實に生かして行く事の中に存する。されば、自己を眞にその根底より充全なる満足感を以て搖がす時は、常に自己が外部のものゝ爲にその眞實なる道を拓いてやつた時のみである。古來、偉人として人類史の中に久しく仰がるゝ者も、また總て、その生涯に依て他を最もよく生かした人であつた。人は「人間の模範」として、それ等の人々を尊敬する。その止むに止まれぬ尊敬の念の中に、自づから、人間眞實の生き方が露はされて來てゐるのである。

○

自己は、争ふべくもなく、他と異なれる獨自なる一のものである。然しながら、その内容をなすものは、すべて他の一切の力であり、その生かし行くものゝ實質は、こ

の歴史社會的環境の一切である事が忘れられてはならぬ。自己はむしろ、かゝるものを生かし行くための、一つの方向起點として、獨自なものなのである。

であるから、自分を出來るだけ廣く、この社會外界の上に擴げて行かうとする、人間の本能も、實は、この自己な

る起點によつて周圍の一切のもの

を生かして行かうとする意欲の萌

芽と理解せらるべきものであり、

また他の一切のものを自分の中に

取込み獨占しやうとする本能も、

やがて、夫等を眞實に生かして行

くために、よく正當にそれ等を把

握し理解せんとする傾動のはじめ

と解せられねばならぬ。

○

人間は一つ一つ、獨立の肉體と精神を以て、この世にその生存を受けるがために、その生命の實質に目覺るまでは何處までも、この肉體の別異による自我を中心としその欲望を以て生きてゆく。これは、生物一切に通ずる本能であ

り、云はゞ生命の殻である。この本能の殻が打開されて、生命はその實相のまゝに純に跳り出て來ねばならぬ。そうでなくては人間のまことの高貴なる眞の生活は顯はれて來ないのである。

秋のうた (三)

秋くさ

さまよひくれば秋くさの

一つのこりて咲きにけり

おもかげ見えてなつかしく

手折ればくるし、花ちりぬ

佐藤 春夫

(八)

近世の諸思想は、一面に於て既に社會民族の連帶に目覺めつゝあるにも係らず、猶、一步を深める事をしない爲に、人間生存の意義はまだ、この本能的なる欲望的自我の立場に立つておる。それ故、彼等の生活を常に貫くものは克服であり闘争である。人間は外境を克服することに、

階級は他階級を殲滅するところに、民族は他を壓伏するところ

に、常に、その道をもつとせられる。

然しながら、闘争は、本來互に全く異他なるところのもの

の間にのみ成立するところの原理である。相手と自分が

全く、異他なる場合に於てのみ、自分を立てるために、他

は亡ぼされなければならぬ。環境が人間の生命に全く關聯なき異物であり、ブルジョアが労働者の生活に對しては全く別世界の者であり、他民族は其顔を相見る外、全く何の關りもなき異物であるならば、闘争が、其處に原理として行はるゝ事また止むを得ぬであらう。然しながら事實はそうでなくて、互に密接に相關聯してゐるのであつて、自と他とはむしろ相對的な位地の相異に外ならぬ。

されば、闘争は、是等の間を貫くところの唯一原理では斷じてない。

○

互に異物ならざるものゝ間を貫くところの原理は秩序であり協調である。

○

近世諸思想が、遂に齟齬するところのものは、常に秩序なき混亂に終つたことは、たゞ闘争克服の一面に於てのみ、人生の意義を見たからである。そのために、戦ひつゝ、猶協同する人類の高貴なる真相は、全く蔽はれてしまつた。協同の一面を失へる原理なるが故に、これは遂に無政府的となるのである。

闘争はまた人類の辨證法的なる飛躍のために止むを得ざるものであらう。然しながら、それはたゞ新たな秩序のための飛躍のためであり、云はゞ彈機である。それは、あく迄、より高き正道のために奉仕するものでなければならぬ。

(九)

我國、國家主義の標識たる「日本精神」の勃興と共に「佛教復興」の聲を聴くに至つた事は、誠に意義深いことである。佛教の原理とするところは「無我」と「正道」である。かの本能的なる欲望的自我を打開して、一切と共に生くる生命の實相に出て、すべてを悉くその眞實なる姿に生かしてゆく正道を樹立してゆく、そのことの内にのみ人間の意義を認める。それが佛教の確持して變ることなき原理である。

この原理は、過去に久しく、この民族と共にあつて、この島國人種が、やゝもすれば、陷り易き狭小なる性情を、其内部より打開して、常に博大なる宇宙の公道に引上げ、そこに引上げ／＼する事によつて、其高貴なる民族性を産

み出して來た。

今や、すでに巨大なる歩武を、世界に向つてひらかんとしつゝある、この民族の勃興期に際し、我等はまた以て掲ぐべき「次期人類の新たな秩序の道」を用意してあらねばならぬ。それは、必ずやまた、東洋精神文化の上に、西洋文化の成果を再構成するものでなければならぬ。それでこそ、東西を綜合したる新たな「次期人類文化」である。その責務の中樞に置かれつゝある我民族は今や再び眼を新たにして、この東洋精神の本源、「佛教」を凝視せねばならぬ時が來た。

そうして、その深遠なる反省を本源として、新たな人類の道をがつちりと組み上げて行かねばならぬ。

○

このことの中に、我々の「淨土主義」もまた立つてゐるのは云ふ迄もない。

(終)

秋のうた (四)

菊花の詩

一夜新氣著瓦輕
芭蕉新折敗荷傾
耐寒唯有東籬菊
金粟花開曉更清

白樂天

桶に方角は解らぬ

彌次喜多の滑稽無類な珍談漫劇にすつかり當時の人氣をさらつた「東海道中膝栗毛」の作者として名高い十返舎一九が、深川木場のさる富豪の邸に招かれた時のこと。氣持のよい歡待にスツカリ御馳走になつて彼が歸るとき、主人に向ひ「先程頂戴いたした風呂は大層結構ですから、あの風呂桶を頂いて参りたいのですが」と言つた。主人が「それ程お氣に召したなら、後刻お届け致しませうと言ふのを、自分で頭から被つて禮もソコソコに出た。何しろスツポリと風呂桶を被つてゐるので、往來の見當がつかぬ。無闇に歩いてゐるうち、遂々一人の武士に突き當つてしまつた。驚いた武士が『無禮者何の遺恨あつて身共にブツカッタ?』と眞赤になつて刀の柄に手をかけて詰めよると、桶の中から『人間がブツカッタらお腹も立たうが、桶には方角が解らぬ。ステ桶、ステ桶』と、ヨタヨタ歩き出した可笑さに、武士も思はず吹きだしてしまつた。一九は危い生命を頓智によつて救はれたのである。

秋の話題

古書十夜法會物語

代田 重雄

神の留守よいことにして佛達

と古川柳にあるが、十月は神無月といつて諸神祇が出雲大社へ集り給ふので、留守となり、佛さま達ばかりの世界である。神の留守をよいことにするとは面白い諷刺であるが、この月は昔から、盛大な佛事法會が多く行はれてゐる。淨土宗でする「お十夜」、日蓮宗でする「お會式」、「東叡山開山忌」等は先づ代表的なものであらう。以上の如きものは何れも、舊記に歴然と記されてある。

このお十夜法會に就いて、江戸時代といった徳川期の古文書の中に書かれたものを、何かの参考ともなることであるから、こゝに列記してお目にかけやう。

十夜法會は昔は、陰曆の十月六日から十五日までの十日間修せられた。地方へ行くと未だこの陰曆に行はれてゐる所もある。そしてこの十夜念佛法要を兼ねて、知人を招いて饗應するところもある。十夜とは、十夜念佛法要の略で、即ち六日から十五日までの十夜の間別時念佛を修する故に十夜といひ、又十夜講とも稱してゐるが、一般宗徒間では單に「お十夜」と言つてゐる。今日では日取は一定してないやうである。

舊記の傳に因ると、後花園天皇の御宇に、平貞國が眞如堂（京都黒谷）に三晝夜參籠して夢を蒙りしに起る、とある。

喜多川守貞の『近世風俗志』に、

「十月六日より十六日に至るを十夜と云、白河の女院宮中にて始めて勤行せしめ玉ふ、其後後花園帝永享二年、伊勢守平朝臣貞經父母此法會中興あり、又後明應四年武州品川願行寺開山勸譽祐崇上人勅に應じて京都に入り、十夜法會を淨土宗にて執行することを聴され鎌倉光明寺に歸り初めて之を行ふ、淨土宗諸寺にて修行するの始也」と述べてゐる。

六づかしい考證や正非を云云することはこゝでは避けて、筆者はたゞ古文書のそれを傳ふのみであるから、讀



者に於てもそれを御了承あられたい。

『東都歳事記』といふ本の十月六日の條下、

「今日より十五日に至る迄淨土宗寺院十日十

夜法要執行（此間説法別時念佛等ありて參詣

多し、今日を十夜紐解と云、十四日は龍等あ

り此間俗家にても法事をなす）増上寺（十四日

檀林よりも出る、此日は庶人拜する事ならず）

本所回向院、深川本誓寺、三崎法住寺、南品

川願行寺、青山善光寺（尼寺）、奥澤九品佛（淨

眞寺）、淺草念佛堂、千住勝專寺、行徳徳願寺」

以上の如く記されその事の起りは、先の近世

風俗志とは同一に述べられてある。

同じく『東都歳事記』十四日の條下に、「十

四日、深川靈岸寺十夜法要（未の刻。代田曰

今日の午後二時）目黒祐天寺十夜今夜より通

夜あり」とある。十五日には滿散となるので

十四日の夜は通夜を行つたらしい。江戸六阿

彌陀の第六番目である龜戸の常光寺の十夜に

十四日の通夜の行はれたことも、同書に見え

てゐる。

さて以下試みに當時の唯一の社會詩、民衆

詩たる「川柳」又は「俳諧六武川」に現れて

ある十夜の句を抄出して見やう。

そうばんのひしげた所で御十念
（明和二年柳樽初篇）

そうばんが鳴りやすと嫁舌を出す
（明和七年柳樽五篇）

そうばん——は双盤、又始つた念佛、又始

まつた姑の悪口。

十夜からよほど寄りかと母は聞き

（明和九年柳樽七篇）

南品川の願行寺のお十夜、近くに品川の遊

里があつたから母の警戒。

とんだこと十夜を南紋日なり

（右）

北の吉原に對して品川を南と稱してゐた。

これは支那の東夷南蠻北狄西戎に擬して、吉

原を北狄、品川の南蠻、深川を東夷、新宿を

西戎に寓意したものだそうである。吉原を除

いた他の遊里（品川、深川、新宿）は岡場所

と稱されてゐた。紋日といふのは、觀月とか

八朔とか遊里の恒例の一種の祝日である。即

ち挿入時。

お十夜は案じるほど

の旅でなし

（右）

十念のしまひ一

ト聲のしかゝり

（明和七年

柳樽五篇）

南無阿彌陀佛。

四谷も道の

なほる十念

（寶曆七年

「武玉川」燕

都枝折初篇）

口切も十夜も

同じ阿彌陀堂

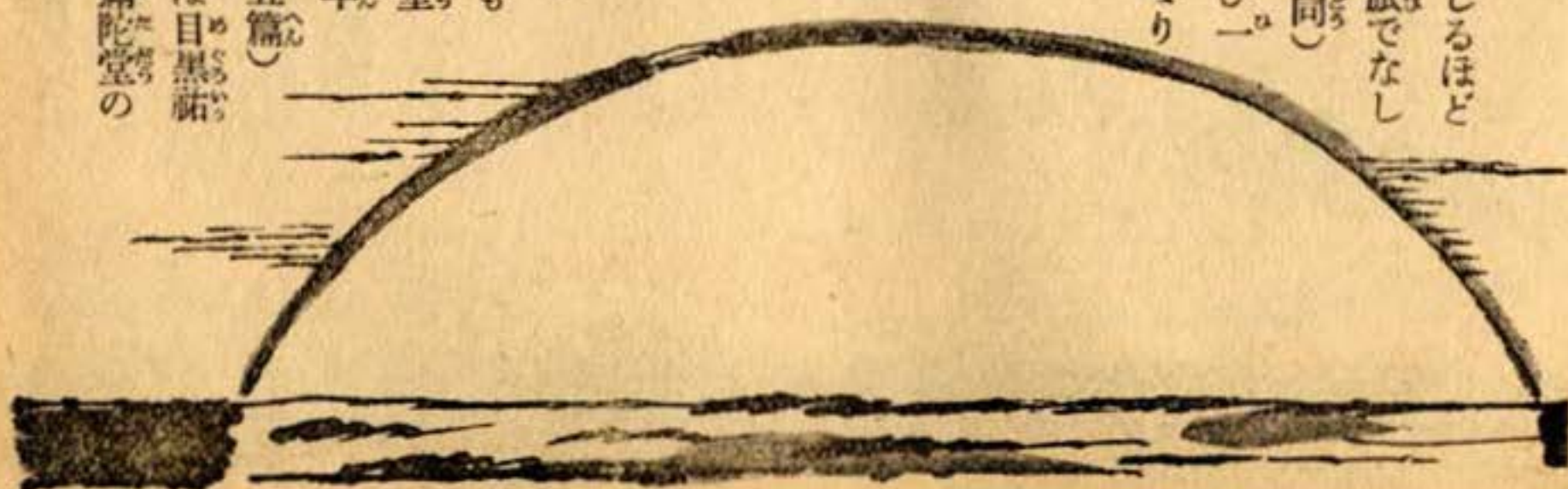
（寶曆十一年

「武玉川」五篇）

この阿彌陀堂は目黒祐

天寺にあつた阿彌陀堂の

如く思はれる。



へらの實も十夜のうちに僧の數

(寶曆十一年「武玉川」十五篇)

へらとは植物の名、葉は桑の葉に似てその

間に菩提子の如き實を結ぶ。その菩提子のや

うな澤山のへらの實を、僧侶の頭數に懸けて

十夜の股賑を諷したものである。

十夜はしけで泣ツつらが崎

(右)

同)

俳諧武玉川を味つて見ると仲々面白い。(完)

泣ツ面が先——に言ひかく。三崎法住寺を

利かせた柳句。

千疊敷のうなる十念

(右)

同)

千疊とは大袈裟だが、何處かの大寺の本堂

の内陣、双盤の響——。

等々、十夜法會の消息も、これ等の川柳や

支那の民間佛教

みんなんぶつきやう

——『白菜經』や『鯉魚經』——

釋 不 空

——九月になるとみんな山の中を掃除する。十月になると路には燈籠をかざり、茶店には靴屋さんも、金物屋さんもやつてくるし、それがみんなてつだつてお茶をもつてきたり、茶碗をそろへたりする。みんな十年のしりあひのやうにめい／＼自分の

できることをして働く。そうやつてるところに音楽をやる者がやつてくる、獅子舞の人がやつてくる、勇壯な太鼓の音、活潑なおどり、みんなはたまらなく愉快になつて一緒にたのしみあふ。まるでお金の心配のいらぬ別世界のやうだ。私達知識階級の

ものは此の生き生きとしたありさまをみて、はじ入るばかりである。私利私慾のためでなく強い人類の愛情が此の中にあふれているのだ。——

此は支那の北京の町を

少しはなれた妙平山の進

香(おま

いり)の

有様を支

那の學者

が見物したと

きの文章であ

ります。此のお

まいりは随分有名

なもので全國から澤山の

人があつまつて来て、た

だあつまつてくるばかり



でなく道路を修繕したり、路に燈（おあかり）をつけたり、お客さんの靴のやぶれたのをつくろつてやつたり、こわれた銅器をなほしたりしますが、みな自發的に一錢ももらはないでやるのです。民間の信仰といふものには口先ばかりでない、おそろしい力があるものです。

淨土敎といふのは支那でもわかれよい佛敎だといふ風になつてゐて、地方のお百姓さんたちのお婆さんなどの間にとても盛です。何か失敗したときには「南無阿彌陀佛」などといひますし、とてもうれしいときには「謝天謝地謝菩薩」などとよろこびます。

南陽といふ地方では淨土宗の敎へが歌になつてゐる。日本でいつたら御詠歌のやうなものです。お婆さん達はこの佛敎歌をととても大切にしておぼへてゐる。信心のある人にだけ敎へてやるそうです。中にはとても面白い名の歌のお經がある。「白菜經」とか「鯉魚經」とか。

つまり野菜や鯉などといふお百姓さんの身の近の物をとりあげてお經にしあげてゐるところは實にえらいものです。支那のお百姓さん達は文字も讀めぬほど智識がないのによく努力してこれをつくつたなあと感心させられます。

中の一つ、「香爐經」といふのを譯して見ました。

——金の香爐、足が長いよ、一年間に何回香をたいてもらつたかね？ 朝早く香たく人は誠心よ。黄色い香はかまど様にあげませう。ひるは又ひるの香をたきませう。賢い嫁つこはつれあいにすすめる。香たきませう黒々と。賢い嫁つこはお父さまによくつくす。ナムアミダブツ。——

民間の佛敎は根強い。だがそのかはりいろんな物がまちつてゐる。中には變なものがあるから、そんなものはいくら信仰だからといつてとりのぞかないと民衆に害があります。だが民間につたはつた格言の中にはなか／＼

するどく世の中を見きはめてゐるのも、あるしまつた佛敎のさとりにかんする面白い見方をした傳説も多い。

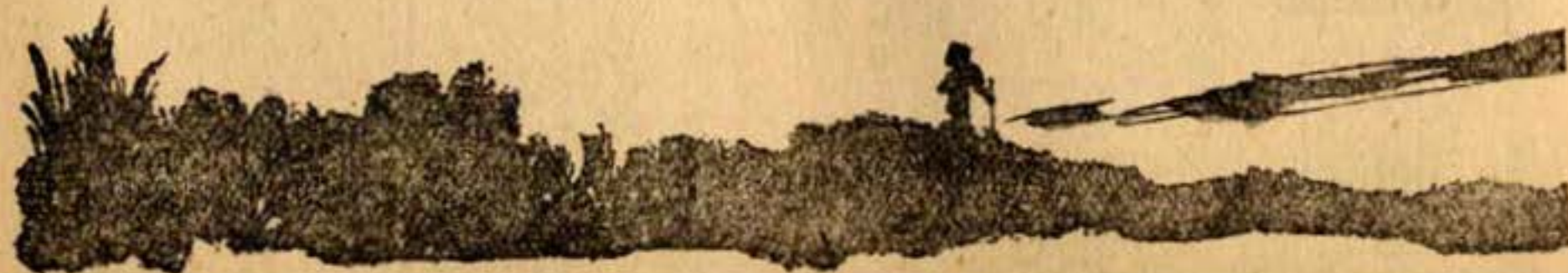
「あわてて佛の脚にだきつくな」

これは日頃悪いところがけでゐて、急にあぶなくなつて佛をたよりにする、苦しい時の神だのみといふ奴。

坊さんもなまけてはいられません。民間の格言はなか／＼坊さんに注意してゐる。

「和尚さん饅頭ばかりたべてゐて受戒しないのかい」

坊さんはそれだけ民衆的になつてゐた。



「和尚さん頭ツル／＼、不作（キキン）でも心配ない。」

坊さんになれば喰へる。

こうした考は恐いことだが、支那民間にあります。坊さんと佛が別物になつて行くやうでは佛敎も正しい途を進めない。民間に根強い芽があつても、ムザ／＼それをすこやかな木に成長させてやるものがなくなつてしまふではありませんか。

次に傳説を一つ。

明朝の時分（すこぶるあやしいのですが）に、浙江省の錢塘といふところに一人の漁夫がゐりました。その名は懷惱といふ。まあ「なやみ」といふ名前です。この人は非常な働きもので朝から晩までよく働いて、とつた魚を町に賣りに行つてゐた。彼には一人の妻があらまして彼のゐない間は留守をしてゐたのですが、此の妻君がとう／＼或日の事、縣の役人といひ仲になつてしまつた。彼はそんな事はしらないで毎日、はたらきにてゐました

が、つひに妻の不義にきがついた。きがついた事はついたが相手は威勢のあるお役人。一寸相手になれそうもない。そこで懷惱は大に

いふわけです。よろこびとかなしみが裏表になつてゐる此の世の中のカラクリがハッキリわかつたのです。なんと難しい物語であります。これが支那の中部地方にかなりにひろまつてゐる説話の一つです。この物語は、「人に妻をねとられてもあきらめろ」といふ

——懷惱門を出で去つて、歡喜門に進み来る。——

あきらめ哲學をおしへたものではないと思ひます。それどころか、低迷して牛の如く土の

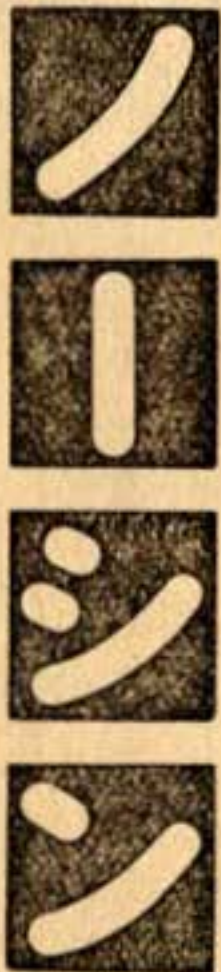
つまりその苦しみの中でその漁夫は解脱したのです。懷惱といふ自己の我を揚棄したと

上であつてゐる民衆に何かしら前方を正しく見る眼をあたへるものではないでせうか？

最も進歩した 純正頭腦藥

頭痛で頭がワレル程カンカンしたり、眉間の邊りが針で刺される様にチクリチクリと痛んだり、又頭痛と流行かなくとも、何となく頭が重くてボンヤリしたり、クシヤクシヤしたりイライラしたり、或は過度の讀書、執筆、裁縫、徹夜映画、觀劇後等で心身の疲勞を感じた時等、スグに「ノーシン」を服用せられよ。今ノーシンをのんだ事さへも、思ひ出さない程キレイに痛みは消え失せて、それこそ暗闇から抜け出て来た様に頭はハッキリと明快になり、思ふ存分、愉快に、事務勉強、讀書、家事、裁縫等を續けることが出来る。論より證據スグ試みられよ。藥價は三十錢、五十錢、一圓。全國の藥店やデパート藥品部にて販賣す。

頭痛に



頭痛に一番
屬關に無害

町取區東市屋古名 社會名合郎太長川荒 元造製

淨土に往生するとは？

大本山知恩寺法主

桑田 寛隨

淨土がこの世に在りや、來世なりやと喧しく沙汰せられましたか。宇宙の實體實相を眞空妙有なりと觀する時は、これを現世にありといふも、遠く來世を期すべしといふも、縁起は無盡にして、何んとも觀らるゝものと思ひます。然し我々凡夫が果して現在のこの世を寂光の淨土と觀ることが出来るでありますか。何事に限らず、現代人は人間中心で行かふと思ひ、この現在を離れて事物を考へることを迂遠に思ひ、或は自分の經驗以外の事を嘘だとする傾きがあります。神や佛を信するにしても、病氣の平癒、商賣の繁昌それも一攫千金、肉慾五感の満足、能く云ふて家庭の平和と云ふような、御利益的切に在るものとしてでなければ、流行らぬ世の中がありますから、淨土の實現も遠き來世を期すると云ふのではうけが悪く、いつも月夜にお正月の詠の如く、一家揃ふて衣食住に不自由なく無病長壽位の安價な極樂に満足したいといふ風であります。もとより

達人悟道の諦觀から「娑婆即寂光淨土」と觀るのもありますが、この頃の人達は先づ西方の淨土を否定して現在に實現するのだといふに在るやうで、すつかり佛教を離れて勝手の理屈をこねるならば辯は自由ですが、苟くも佛教といふ埒の中で、諸佛の淨土を否定するといふのでは、四本柱の土俵の外で相撲を取るやうなものと思ひます。何程人智が進み、科學の研究が深くなつて、宇宙の幽微を闡明したとて、人の世から苦惱を去り、生老病死を無くすることは出来ないと思ひます。法然上人も愚癡の法然房、十惡の法然房として、一生を過されたのも、自力の淨土建立を不可能と嘆かれたからでありました。かく云ふて居るうちに日々此世を残りゆく淨土の信者達は、來世の淨土は嘘であると云はれ、現在の淨土には間に合はず、それこそ死んでも死に切れぬ迷ひであります。かく申す自分も、日々に老ひ行く身で煩惱罪業は限りも無く、日暮て途遠しの歎

きに禁へぬのであります。

若し現在に淨土を建立するものが淨土門であるならば、往生淨土を標榜するの淨土門は倒れて此土入聖得果といふ新淨土門が出来る譯で、誠に滑稽なものになりませう。智者や學者を對手にせず汎く大衆を對手とするのが彌陀の本願であり、光明吉水兩大師のすゝめでもあります。萬人は萬人ながら納得了解が出来安心が出来て確かりとしたお淨土の信仰こそ正しい淨土門の信仰であります。盈つれば缺くる人の世によし淨土が出来たとしても、直に崩壊して仕舞ふのが娑婆の通例でありますからそれでは安心が成らず、矢張り建立常無衰無變は來世に期すべき理想で、我等の生涯を通じて之に向はしめてこそ、弊惡の凡愚が苦惱の中に法悦を感じて、知らず／＼善人となるのだと思ひます。若し自分で淨土を建立しなくてはならぬときは少數の智者や學者は更も角も、一生を苦惱煩悶に終る多數のものはいかに成り行くでありませうか。法然上人御一生の御苦心は何もならずたゞ、無駄事をして居られたことにもなりませう。我々不淨の慾望で出来上つた人間の淨土が、なんで夢幻泡沫に終らぬでありまするか。だから彌陀如來純淨無漏の佛心より現はし玉ふ確かな淨土で無くては安心はならぬといふのであります。

次ぎに念佛して往生するといふ、この念佛も、極めて生ふな心で信ずるのが、法然上人の眞意でありまして、御遺訓にも「唯往生極樂の爲には南無阿彌陀佛と申して疑ひなく往生するぞと思とりて申

す外には別の子細候はず」とあります。そも／＼光明吉水の兩祖が本願の念佛を開顯せられたのもその特色とするところは、凡入報土と云ふ事でありまして、凡夫の心のまゝで純淨の佛の報土に往生出来ること云ふのが夫れであります。凡夫の心とは、爲すことも思ふことも實我實法の二執に囚はれ、三毒五慾の繋縛を脱がるゝことの出来ぬのを申します。その穢れたる心から發る念佛をそのまゝ攝め取りて下さる處に、佛智の巧妙本願の尊さがあるのであります。一枚起請文の御意もこれを現はさんが爲めで、唯一向に頼めば助けて下さるものと信じて念佛するのが本當であります。それが後の世になりますと色々彩色され文句義理を附けられて、いかにも深々の義が在つて其義理を知らねば往生はならぬと云ふやうに取り沙汰するに至り、念のこゝろをさとりて申す念佛になつたりして、折角の念佛も其の念佛にならぬかと心配せねばならぬことになるのです。愚鈍の凡夫にそんな心配をさせねばならぬといふ様なことではならぬと、一枚起請文を御書きになつたものと存じます。無位無官の愚民が淨土へ召され至尊に咫尺して無上の面目を得るとするのが淨土門の信仰で、聖道の智解を假らなければ成らぬとすれば淨土門の特色は無くなつて仕舞ひます。

五劫の思惟・兆載の御修行に依つて成就せられた善巧の念佛でありますから、何程我等が測量したからとて之を識ることは出来ません。いろ／＼に考へるよりも單に佛力を信ずれば足るのであり、ま

た信じて申す念佛も、何を案ずることもなく素直に「助け給へ」と思つて申せば宜しいのであります。

裸躰貫て道中御免の雲介に、貴人だから羽織を着て籠を擔げとは無理の注文であります。元來雲介同様と自身を知るのが「十惡の法然房」と仰せられたる所以でもありますから、あまり案じ過ぎさずして念佛するのが法然上人の勧めであります。我等が電車や自動車に乗つて日々利便を得るやうに、唯本願の車に乗るのであります。が、それを一々車の構造を調べた後でなくてはと云ふことでは折角の利器も役に立たぬこととなります。其上人間の電車は時々故障が生じて輕我をすることもありますが、佛の本願には萬々一にも間違ひはありません。かく信ずるのが本願に乗することであり善導大師は一心正念にして直ちに來れと云はれ、一筋の白道は唯一向に念佛して進めば彼岸に到る、或は道草を喰つたり、或はインチキ案内者にかゝらぬやうに用心する丈でよいと思ひます。

然しこゝに誠むべきは虚偽や慢心であります。道に志すものともすると墮つるものはこの虚偽慢心の罪であります。慢心が生ずると利慾に迷はされて、どんな罪惡も恥かしいとも思はず平氣で犯す様に成るものでありますから、我は道心者であり念佛者である。と自分の道心や念佛に自惚れると折角の信仰も臺なしになつて仕舞ひ、横道の魔道に墮ることとなりますから能く之を慎まねばならぬ。其用心の爲に誡められたのが「凡入道の無智の輩に同う

して唯一向に念佛すべし」との御遺訓であります。

阿波介といふ法然上人の在家の弟子で、まだ弟子と成らぬ時は人柄の卑劣な殘虐の性質の男がありました。上人に歸依してからは道心を起して無二の念佛者となりましたが、或る時上人は、御自分とこの阿波介とを指して、「彼の阿波介も佛助け給へと思ふて念佛し、この法然も佛助け給へと思ふて念佛するのである。念佛は人に依りて勝劣の在るものと思ふ勿れ」と上足の鎮西上人等を誡められたとのことでありますが、この話は上人が法を信ぜらるゝの最も篤きことゝ、自分を常に十惡愚痴の法然房と譏下せられて通された尊き御心とを拜することが出來ます。かくの如く心を謙虛にして正直に進むのが念佛者の心得であります。誠に正直赤裸々に自己を反省するときは、その罪惡の深重なるに慚ぢ驚いて、謙虛の心が自然に萌し願力を信頼するに至るものであります。こゝが自己本眞の面目を認めて進めよといふ他の聖道門と異なる所であります。然し慢心無く、正直に自己の罪惡を認むるといふ事は即ち知らず識らず本眞がひらめいて來るといふことにもなりませう。

法然上人の御歌を三唱して此稿を終ることに致します。

阿彌陀佛と云ふより外は津の國の

なにはのことともあしかりぬべし

をはり

ユーモラス

・・な・・

信仰實話

失業の天才

鶴田湛泉

『あなた！ 又なの！』

會社から消然と戻つて來た啓吉の顔を眺めて、妻の春子は不安そうに訊いた。

『ウム、鹹首れた。』

『あなた、失業の天才ね。ホホ……。』

これまで度々失業に馴らされて來た春子は人一倍大きな眼を圓くして朗かに笑つた。

『まさかね。』

『でも、初めの中こそ、一回二回と數へてゐましたがもう覺え切れませんわ。多分、今度で十何回目ね。』

『そんなかな！』

『何も自分の失業に感心することないわ。今度も又上役の方と喧嘩したんでせう。』

『御賢察の通り。』

『あなたのやうな、悲憤慷慨家は、今の世ぢや通用しないわよ。今の世の中は、澤山の人

が、烏が白いと言へば、一人黒つて言つても通らないですつて。』

『でも、黒い烏を白いとは、俺には言へない。俺のこの性質は、生れ變らなければ直らないよ。』

『すると一生失業の連續つてわけね。心細いわね。……でも、あなたえらいところもあるわ。だつて失業しても一週間と遊んだ事がないんですもの。』

『上げたり下げたりだな、捨てる神ありや拾ふ神ありさ。』

『オホホ……。さあ、くよく／＼しないで、いつもの通り二人で、いゝ口を捜しませうね。』

× × ×

『どうだつたの？』

職を捜しに行つた啓吉が戻つて來ると、さ

さんしよ文學

天氣豫報は大當り

……午前中は天氣はよい方ですが午後からは次第に悪くなり、珠によると雨があります。

ラヂオの天氣豫報を聞いて、出掛けに母親が傘を持つて行きなさい、と云ふのを、『こんな天氣に可笑しくつて』と云ふ譯で、手ぶ

ろで家を出たが、天氣豫報は見事に當つて、店を閉つて歸る時分は土砂降りになつた。彼は母親の云ふことを聞かなかつたのをしみに

み後悔しながら、ぶぶぬれになつて歸路を急いだ。と、後ろから『本間さん入つていらつしやいな！』

と麗な女の聲に振向くと、同じ店の子さんが、傘をさしかけて、花のやうに立つてゐた。彼はどき

んとしたが、無遠慮に傘の中へ飛び込んだ。……

すがに春子は心配そうに訊いた。

「今日は三りんぼだ。一軒はきまつたばかりだと云ふし一軒は年が行きすぎてゐるんだとさ。」

「もう一軒は。」

「喧嘩して来ちやつた！」

春子は眉をひそめた。

「いよく採用と定まつてサラリーの話となると三十五圓で来いと言ふんだ。それぢやあ夫婦二人では食つて行けないから、もつと出して貰はうと交渉しようとしたら、社では温厚な紳士でなければお拒りいたしますと来た。そこで、到頭口論が初まつてね。」

「口を捜しに行つて喧嘩するなんて。」

「生れ付きだねところでも一つあつたな。」

「あの鐵工の方？ まさか、鍛冶屋には、化

けられないわ。」

「當つて くだけろだ。」

「行くつもり？ 全く勇敢ね。たのもしわ。」

「……あなたそんな事を書いて大丈夫？」

春子は、履歴書をのぞき込んで不安そうに言つた。無理もなかつた。それには二十年鍛

冶の經驗ありと書き込んである。

× × ×

妻には強い事を言つて、家を出て来たものゝ、幸運橋の山本鐵工所の門前に来た時は、遺入つたものかどうか幾度か躊躇してゐた。

が、とうとう勇を鼓して虎穴に入る思ひで門をくぐつた。

やがて美髯を貯へた紳士の前に引き出された。

が、彼は何か恐ろしい犯罪を犯した者が、裁判官の前に引出された被告のやうに、おどくとして、とてもその紳士の顔をまともに眺める事が出来なかつた。

「君かね、二十年カジヤをやつてゐたと言ふのは、随分腕はたつしやだらうな！」

「ハッ。彼は、返事が咽喉の中でゴロゴロとつかへた。全く針を呑む思ひであつた。」

「これは、何と言ふね？」

紳士は、テーブルの上に置いてあつた一本のヤスリを取り上げて彼に示しながら訊いた

「ハイ、ヤスリです。」

「ハハ、ハハ、ヤスリは分つてゐるが、何と

家の戸を開けた時に、母親は

「傘を持つて行けばよかつたに」と叱つた。が、彼は朗かに

「そうだったよ！ 天氣豫報は大當りだった。」

なかが違ふ

若くて、美しくて、いつも流行の先端を切らうと心掛けてゐる婦人があつた。ところが、その婦人と來たら、借金取を追拂ふことに妙を得てゐて、仕立屋でも花屋でも帽子でも、およそ借金を拂つたことがない。

或る日、下宿屋のお主婦と家の前で行逢つた。婦人はお主婦さんの帽子を見て云つた。

「あら！ あんた、私の眞似をしやうつて云ふの？ 私と同じ帽子をかぶつてさ。」

お主婦さんは昂然と答へた。

「お合憎様！ 私のは勘定が拂つてあるんですからね。」

「言ふ名のヤスリだね。」

頭難關がやつて来た。ヤスリに色々名前があらうとは、今迄知らなかつた。彼は、今更圖々しく、のこ／＼やつて来た己れの無暴を悔いた。と云つて今更逃げ出す譯には行かない。足が小さく震へ出したのが、自分で解つた。もう就職どころの騒ぎではなかつた。彼は眞赤になつて目をつぶつて、何とか元氣を出そうとした。

「一寸見せて下さい。」

やつとの事で、それだけ言つて。

彼はヤスリを紳士から受けとるとその上を指先で觸つて見た。それは冷たいすべ／＼するやうな何とも云はれぬいゝ觸感だつた。

「これは、羽二重と云つてますな。」

と言つた。勿論出駄羅目だ。

「ウム、羽二重？」

紳士は明らかに意外と思つたのか、そのヤスリの表を見たり裏を返して見たりなどしてゐた。

紳士のいさゝか遠てた態度を眺めて、彼は初めてホツとした。

「私の地方では、そう申てます。啓吉は、我ながら名答だつたと自分の奇知に感心した。」

「羽二重とも云ふかね。所によつては名が變るからね。紳士は感心しながら、ヤスリと啓吉の顔とを等分に眺めた。

「一度、手を見せてくれ。」

彼は何のためかと思ひながら、云はるゝまゝ紳士の前に兩手をさし出した。

すると、紳士は一寸ぎゆつと握つて放すと「随分軟かい上品な手だね力仕。事をして来た手とは思はれない程だね。微笑して云つた

ギクリとした。素狀が看破されたと思つた。

「いえ、二年前に脚氣に罹つてずつと遊んでゐましたのでこんなに貧弱になつたのです。」

始めて嘘をついた。「ウム ソーカ。」

紳士は、ちつと啓吉の顔をみつめてゐたが

やがて、「よろしい明日から来たまへ。」

思ひがけない結果に、啓吉は目がくらんだ。事務所から出て来た時は、ビッシヨリと出た冷汗で身體が冷たかつた、

其後も彼は相變らず失業と就職とを繰返し

てはゐたが、其間にコツ／＼貯めた金で、借家の二三軒も持つやうになり、生活も可成り豊かになつて来た。

ところが、去年近畿地方を襲つた風水害で大阪市でも一番被害の多かつた港區にあつた彼の借家は残らず押し流されてしまつた。その上、八十の老母は水に溺れてしまつた。そして、彼自身も一時危篤に陥つたやうな大きな負傷をしたのだつた。凡てが無に歸した。

ところが彼は、一つの信仰を持つてゐたから、失望も落膽もしなかつた。

今では五十に手がとゞいてゐるが、また元の出發點からやり直んだと、受けた苦痛を忘れたやうに、元氣よく人に語つてゐる。

或日、私を訪ねてくれた彼は、

「和尚さん、人間は希望を捨てたら、もうおしまひですよ。」

と、そう言つて、裾をまくつて、腰の上に五寸ばかりの太い多きな傷を叩きながら昂然と言つた。

私は、一つの悟道に達したやうな彼の態度を見て内心微笑せずにはゐられなかつた。

日本人たる自覺

頭 山 滿 翁

生を得た喜び

我々が人としてこの世界に生れることの出来たと云ふのは本當にこの上もない仕合せなのである。

しかも、日本と云ふ東洋の君主國、世界に比類のない最も麗しい、最も優れた國家に生を得たことは、人間としてこの上もない喜びであると云はねばならない。

我々の尊崇してやまない 御皇室は皇統連綿として眞に天壤無窮にましまし、建國以來一元と雖も變らせ給ふたことがない。

みくにと云ふ言葉を用ひてゐる國、また國民が心からさう呼び得る國は世界中で唯わが日本あるのみである。かゝる國土に生れることの出来た我々は、眞に恵まれてお

ると云はなければならない。

祖先の築かれた國土

この國は我らの祖先が築かれた國である。凡そ風土を異にするところに育つた草苗は移植しても繁茂するものではないと云はれてゐる。

だが我々は父母祖先の一つの連綿たる系統を持つ國民によつて築き上げられた、心底から我らと一心同體の國に生を得てゐるのである。三千年の歴史を有して今日の國家を成し得たのは、悉く我が祖先自らの力によつたのである。

人間としてこれ以上良き環境と云ふものは望み得ないと云つて宜しい。

我々が斯る名譽ある國民として生を得、

國體の精華をます／＼輝かさんがために祖先が成し來つたところを範とし、全同胞が一心同體となつて活動し、祖先の業跡に對して必ず報ゆると云ふ心がけがなければならない。

これは必然の結論である。

信仰を以てなせ！

それはこの輝かしい國體をはつきりと認識して、あらゆる點に於て萬國に秀でたるものとするために、凡ての方面の人達が全力を盡すと云ふことである。

然しこの活動の根本である、世を救ひ人を救ふと云ふことは宗教の信念を以てせなければならぬ。即ち念佛による淨土の建設と云ふも一面には、このことを云ふのである。若い人々は特に大いに修養して、この目的のために活動されることを望んでやまない。

(文責在記者)

★ ★

黑

谷

法

然

上

人

傳

佐

藤

春

夫

第十 勸進念佛往生門 (前承)

(念佛往生を勸進し給ふの事)

或る時上人、靈山寺で、三七日間夜の不斷念佛を勤行し給ふたのに、燈がないのに光明が自らあつた。第五夜に至つて、行道してゐると、勢至菩薩が行列の間に立交つて居らせられた。居合せた人々夢のおもひのうちに幽かにこれを拜し奉つて、上人にこの事を申し上げると、さういふ事

もあらうと答へ給うた。謹しんでこの瑞相を驚異し考へてみると、考察の結果は理由が二種思ひ當つた。一には觀念法門に、「觀經に次の如く見えてゐる——人が常にま心をこめて阿彌陀佛及び二菩薩を念ずる場合には、觀音も勢至も常に修行者と勝友知識(よき友師導者)になつて影の身にそふが如くにお護りして下さる」と見えてゐる。勢至菩薩が道場にお姿を現じ給ふたのは、深く經釋に叶うてゐる。誰か疑心を抱く者があらうか。二には上人は勢至菩薩の垂迹(お生れかはり)であらせられるといふことは、世を

擧げてこれを稱してゐる。この場集つた人々は念佛勇猛で、罪障微薄であるから彌よ信心をまし、勇く鋭く勤行せしめんが爲めに聖力を加へ祐けて幽に本身を見し給うたのであらうか、それならば御在世にも御入滅の後でも、上人の流れを信じ酌まんほどの人は、自らも解脱の行を正して兼ねては他の誤を直すべきである。既に信じてゐる者は彌信を深め、まだ信じない者は早くこれを信じたがい。

後白川法皇、上人を勅請あつて菩薩戒を説かしめ給ひ、併せて往生要集を講ぜしめ給ふ時に、上人は聲を澄して、夫れ極樂往生の教行は濁世末代の目足なり道俗貴賤誰か歸せざらん者——

と、讀み上げ給うたのでこの一言に萬乗の君も臣下の百官も、簾中も殿中も今はじめてきこし召されたかのやうに、心肝に染めて尊く皆感涙を流し給うた。太上法皇は法を聞こし召されて隨喜の餘り左京權太夫藤原隆信朝臣に勅して上人の眞影を寫さしめ、蓮華王院の寶藏に收めさせられた。

第十一 殿下敎命造書門

(月の輪殿の命によつて一書を著はされしおん事)

月輪の禪定殿下九條兼實公は前世よりの因縁で決められたところによつて、信仰は世俗一般に超へ、佛を崇び重んずることたぐひもなく、西方の淨土を願ひ志すところと定め、念佛の行を正業と思召して居られた。それ故建久九年戊午の春、對馬左衛門尉重經を御使者として、淨土の法門の事は度々伺はせて頂いて居りますが、公私の生活の忙はしさに取りまぎれて折角伺つたと思つてもつぎつぎに忘れてしまひます。何卒文字にして頂いて、忘れた時の用意に備へ附けたいものでございますと、お頼みがあつたものだからその仰せ出しに従つて上人は一卷の書物を造り、選擇本願念佛集と名づけて月の輪殿の御覽に供した。その集の奥に云ふには——圖らずも仰せを賜はつて御辭退申し上げることもなりませぬままに、念佛に關する文の重要なもの少々記し之を集め、その上に念佛の意義の要點をも、申し添へて置きました。ただ謹んで仰せをお受けしたいばかり

りにわが身の力及ばぬを省みる暇もございませんでした。まことに慙愧を知らぬと申すにも程を過ぎたものでございます。どうぞ一度お目通しを願ひましたならば、壁の下貼になされて下さいまし人の目につくところへお置き下さいますな。法を破る人が出来て惡道に墮ちさうに存じますから」と記されてあつた。極めて重い罪業のある人は念佛を誹るものです。上人がその著された書卷を秘密にして置かれたのは謗法の罪を造らせたくないと思はれたがためでした。法事讃にも五濁の増す末法の時代には法を疑つたり謗つたりする者が多く、僧と俗とが互に相憎んで法を聞くことをせず、方便を破壊し、われ勝ちに怨みを抱く、このやうな生れながらに光明を知らぬ闍提輩は頓悟の妙法たる教を毀り滅して大地が微塵と成り果てる後の時を過ぎててもまだ、生死を脱し三惡趣をのがれた身となることは出来な。これに同心する大衆もみな破法罪の因縁の有るのを知つて懺悔するであらう（大意）と言つてゐる。それだからよしんば人の念佛を誹謗する者があつたからといつても驚くにも足らない。末法濁世の罪人の定まつた罪である。來世の報は定めし阿鼻地獄であらう。この教を信じ順ふ人は

逆縁を縁として彼の罪人等を濟はうと思ふべきである。

第十二 頭光現顯本地門

（おん頭の光明によつて本地を顯はされ給ふおん事）

元久二年乙丑の歲四月一日に上人は月の輪殿で念佛の徳を讃歎されての後、退出し給ふ時、禪定殿下（兼實公）が庭に走せ降り、五體を地上に投げて上人を禮拜し、しばらくして身を起して御覽になると、上人のおん頭の上に、金色の光明が顯はれ、光はまぶしく透きかがやいてゐる。中に一つの寶瓶があつたと仰せられて御涙にむせび給うた。その時はじめて、上人の勢至菩薩の化身であらせられたと知つた。（愚禿此篇を記すにつけて肅然と身の毛も豎ち、雙眼には涙が浮ぶ。有難く、恭けなさよ、濁世の我等衆生を導かうとて極樂の聖衆が假に凡夫の姿を示して、念佛の行を弘め給ふとは。仰いでその本地を討ね奉れば極樂世界の聖衆である。往生淨土の勸念佛と憑み奉るべく、俯して垂迹を訪へば三昧發得の祖師であらせられる。專修念佛の教の往生は疑ひもない。本地と垂迹と（佛としての

御本體と現世に假りに現されたお姿とは異つてはゐるが、化導はといふと同じお仕事である。即ち、ともに念佛の衆生を攝取して清淨の國土に往生せしめられる。後世を恐れる程の人なら何人と雖も此の師に歸依せぬ筈はなからう。極樂を望む限りの者ならば、何うして上人の釋を信じないでゐようか。

第十三 流罪歸洛利益門

(流罪に服し都に歸られて世を利益し給ふおん事)

建永二年丁卯の歳重箱の隅をほじくり出すような讒者の奏言によつて還俗の姓名源元彦(一には藤井元彦といふとも傳へられる)を賜はり、遠流の宣旨を下されたから上人の勸化を蒙つてゐる道俗貴賤皆歎き悲しみ合つた事であるのに、上人は感悦のおん氣色でゐらせられて、わが身が遠流を蒙るのは邊土を勸化すべき縁のも早熟したのであらう。誠によろこばしい事である。普ねく萬機を教化して念佛門に入らしめようと仰せられた。慈悲誓願の色、外に顯はれ出て、いみじくも尊くおぼえた。月の輪殿はしば

らくのお別れの恨を慰めようと法性寺の小御堂に上人を一夜お泊め申したものである。上人の仰せられるには、會者定離は世の常の習ひで、今にはじまらぬ事、何で今更、深く歎かうか。宿世の因縁さへ空しくないならば、必ず同じ蓮の上に坐ることであらう。淨土での再會はごく近いことです。只今はほんの一時の悲しみで、言はば春の夜の夢ほどのものである。誹も謗もみな縁には相違ないから、先に往生してそれから導かう。引攝縁(四十八願中に特にこの願があつて、淨土の聖衆は欲するがままに有縁の人を淨土内に導き攝取することが出来る)は淨土の樂しみである。現世でさへも疏かな御縁ではありません。同じ名號を唱へ、同一の光明に浴して居ります。さうして同じ聖衆のお護りを授かつて居ります。同法が尤も親しいものです。ゆめおろそかに思召されてはなりません。南無阿彌陀佛と唱へ給うたなら、たとひ住所は隔ててゐても、源空に親しいのです。源空も南無阿彌陀佛と唱へ奉るからでございます。念佛を事としない人は、たとひ肩を並べ膝を組み交へてゐても源空に疎かなわけです。互に三業が皆違つてゐるからです、と申されたから、月の輪殿もさすがに悲哀心

を宥めすかされて、もう一言も口説き給はなかつた。

同じ三月十六日に、法性寺を立出でて配所に趣き給うた。配所は讃岐國小松庄である。(はじめ土佐とあつたのを月輪殿の配慮で領地内の鹽飽に變更を請ひ奉つて後程なく小松庄の生福寺に入らせられた事は他の記録によつて知られてゐる)。これと申すのも門弟の住蓮と安樂との不善の咎によつて傷を求めて毛を吹く詮議立ての讒言のために、罪のない上人を流刑に行はれたのであつた。凡そ讒者の訴に依つて左遷せられた賢哲は、上代にもその例が無いでは無い。吾朝では役行者、菅丞相、異國では一行阿闍梨、白樂天など。皆罪なくて謫所に住み給うた。權化の善巧は凡智では測り難い信も謗も結縁となり、違も順も皆利益を蒙る。上人が配所に趣き給うと帝都は燈を失つたが如く、これに引代へて邊土は盲人の光明を得たるにも似て、洛陽は悲しみを含み田舎な喜びを懷き、悲しむにも念佛、喜びにつけても名號を唱へ奉る大權化の教化の利益は誠に巧妙なものと尊い次第である。

同じ八月(或は十二月八日ともある)勅免の宣旨を下されたけれど、(幾内に住んでいいといふだけで)依然として

京の市中への住還はお許しがなかつたから攝津國勝尾寺に一時住ませ給うて、既に五箇年(四國に半年あまり勝尾寺に四ヶ年)を経て花洛に還歸のがよろしからうとの宣旨を蒙つたので、權中納言藤原光親卿の奉行で建暦元年辛未の歲十二月十二日に帝都に歸り入つて、東山大谷の淨室に居住し給うた。昔、釋尊が忉利天で九旬安居の説法を終つて後、上天の雲から來下し給うた時、人天(人と天人等)大に會つて歡喜して供養し奉つたやうに、今、上人南海の波を分けて都にのぼり給へば、道俗の男女各爭ひ競うて供養を致した。集ひ會る者ども、この一夜だけを計算して、一千餘人に上つたといふことであつた。閑居のお部屋でありながら貴賤賢愚あらゆる人の集ひ來て法を聞くことさながら盛んな市の如くであつた。利益は倍多く信仰は日に新な勢であつた。

第十四 臨終念佛往生門

(御最期に臨ませて念佛往生し給ふおん事)

建暦二年壬申の歲正月二日から、上人は老病がやうや



く起て日頃の食氣不振のおんけはひが殊に加はつた。凡そこの二三年はおん耳とおん目とがだんだん力衰へて居らせられたけれども、往生のおん時が近づかれたものか、兩方とも鋭くなつて、異色を見、もの音を聴き給ふ事、専ら御壯年の頃と違はなかつた。これを見聞の道俗、みな奇異の思ひをした。高聲念佛の相續ばかり勇猛に努められて、その合間々々にも一向外のことを雜へ仰せられないで、唯々淨土の事をのみお談しあらせられた。御睡眠の時でさへ相かはらず念佛を唱へさせ給うた。或る時上人の仰せられるには、高聲に念佛を唱へよ。阿彌陀佛の來り給へり。南無阿彌陀佛と唱ふる者は、一人として極樂に往生せずといふ事なし、と仰せて念佛の功德を讃め給うた。二十四日の酉の刻から二十五日の己の刻（二十四日の夕方六時から二十五日の朝十時すぎまで）までは高聲念佛が一段と勇猛であつた。五六人の僧が順番を申合せて助音申上げた。助音は苦しむのに頽齡で御病惱の御身が一向くたびれも遊ばれない。道俗は隨喜し、お傍の者どもは驚き讃歎した。午の刻になつて念佛の御聲が追々と幽に時々高聲に唱へ給ふ。午の刻の正中に年來御所持の慈覺大師の九條の袈裟を著け給

ひ、北枕西向の御姿勢で、光明遍照。十方世界。念佛衆生攝取不捨。南無阿彌陀佛と誦し給うて、睡るが如くおん息を引き取り給うた。お聲が止で後も、まだ念佛を唱へ給うて居られたものかおん唇おん舌を動し給うた。おん齡は八十にお成り遊ばしてゐた。

第十五 沒後順緣利益門

（御往生の後順緣の者を利し給ひしおん事）

上人の御入滅の後、遺された八方の御弟子たち、皆各、正しい法の道を傳道して念佛は國中に弘まり、稱名の聲が一世に満ち、信ぜざる者少く、信ずる者は甚だ多くなつた。これこそ上人が聖衆のおん身を以て人間になつて現れ給うた効、また聖衆が守護し給ふお力である。或は上人が教化のおんための假名書きの御文章。たとへば大胡（太郎實秀夫妻）に與へ給ふた御消息や二位殿（鎌倉の二位禪尼）へ教化の御返事などのに依つて彌陀の本願を信じ、極樂に往生する、道俗貴賤は年々加はり、この教は日に日に盛んになりまさり、念佛の隆盛に赴く様は眼前に證がある。爰

に禪林寺の靜遍僧都は、上人入滅の後、選擇集に歸依して一向專修の念佛者となられた。この僧都は眞言家の賢哲で小野廣澤兩流を相傳した程の明匠であつたけれども、淨土の法門に縁が有つたものか、彼の宗を捨てて念佛門に入り給うた。これ等はみな上人が入滅後の御利益である。現前の證を見聞して、化導の普及を知るのである。

第十六 沒後逆縁利益門

(御往生の後逆縁の者を利し給ひしおん事)

上人は左遷の時、予に語り給うたのは、わが身の流罪は別に歎き悲しむところではない。念佛の興行も洛陽ではもう年久しくなつた。今は邊鄙に赴て田夫野人を教化せん事が年來の本意である。但、心配な事は源空が弘めてゐる淨土の法門は造惡の凡夫が生死を出離する重要な法であるから、念佛守護の神祇冥道が、いはれのない障礙を咎め給はなければいいが。長く存命して因果の空しくない事を思ひ合したくないものだと思はれた事があつた。その後十箇年の間に承久の亂が起つて(以下六十字略)……

又後堀川院の御宇安貞二年丁亥の歲六月二十一日比叡山の衆徒一同が會議をして曰ふには、專修念佛が世に興行して以來、聖道の諸宗を習學する人もない。それ故、奏聞を請ひ奉つて後、善導が勸化の念佛の行法を停廢せしめるべきである。所詮彼の法門の起源と興隆とは法然房が根本であるから、大谷の墳墓を破却し、源空が屍を取つて鴨河に流すべき事を決議し、奏上申し、遂に勅許を蒙り同二十二日に山門の使徒が大谷に下り來て廟の堂を破壊しようとした。その時京都の守護修理亮平時氏がこの事を洩れ聞いて、右兵衛尉内藤五郎兵衛藤原盛政入道西佛を差遣はした。盛政は子息一人を從へてその場に臨み向つて、たとひ公家の御許下があらうとも、一往は仔細を武家に通告すべきものをこの事もなく是れを執り行ふとは、甚だ以て狼藉至極、甚だ無法である。もしこの制止を無視するならば武家の成敗に従はねばなるまい、と頻りに禁止したけれども山門の使等は敢て従はなかつたから、盛政入道は大聲に喚んで云うに醫王山も許し給へ。

「念佛守護の四天王。八大龍王護法の天童に代り奉つて佛弟子西佛が魔縁を打排し申し侍らう。これは必定、

天魔波旬等が癡侶に身をやつし、偽つて山門三千の使と名告つて難儀を仕掛けると見た。思ひもかけず、戦の庭を極樂に往生への門出とし、凶惡の輩を臨終の知識とする因縁とは存じも寄らなかつた。汝等各も南無阿彌陀佛と唱へよ、片つばしから一々壽命を斷つてくれよう。公には關東の御家人として弓箭を携て狼藉を防ぎ、私には西方を願ふ念佛者として師恩を報じて兇徒を罰すべし」と命を捨てて馳せ廻つたから面を向ける者もなく蜘蛛の子を散らすが如く皆逃げ去せた。宇都宮入道（彌三郎頼綱入道蓮生）が、不意の事であつたのに、五六百騎を催し從へて馳せ參じ廟堂を守護し奉つて、

「哀れなるかな。昔は名利のために關東の將軍に侍衛し今は菩提のために西方の上人を守護し奉る」

と申されたから人皆この詞を聞いて感動した。（宇都宮入道は蓮生法師としての名のある歌人でもある。）

終に廟墳を改めて、嵯峨の二尊院に隠し置くこととして、途すがら守護の兵二千騎あまり前後をかため警めて渡し奉つた。これぞ、やがて極重惡人の信順の心なき輩に逆縁を結ばせたわけで、來世には淨土に導き給はうとの善巧

の方便でもありましたらう。御在世の折の慈しみ多きみ訓。往生の後の法流、順逆の二縁ともに御利益はまことに廣大である。具には記し盡すことも出來ない。それぞれわが見聞した事だけにすぎない。

（上人入滅の時弟子（原筆者）生年四十六歳、それまでに數年の功を積んで親しく淨土門の教を承け了せたことであつた。）是に原文を一讀し了つて心氣の爽快を覺えた。簡化して要を得文勢の雄勁なのに因る。但、拙文の讀者諸氏は必ずや正反對の心地がせられたものと存じてゐる。

俗に通ぜしめようといふ名によつて全篇文の古雅を傷けその勢を懦弱ならしめ加之文義を過つた節もないとは保し難い就中惶惶として執筆を執つた前月號の部分などは最も甚しいかに思へて冷汗を覺えた。及ばずとも改稿を期してはゐるが、ともあれ貴重な紙面を空費した一事を編者と讀者各位とに陳謝する（春夫）

念佛を修せん處は貴賤を論ぜず海人漁人

が苦屋まで皆これ予が遺跡なり

法 然 上 人



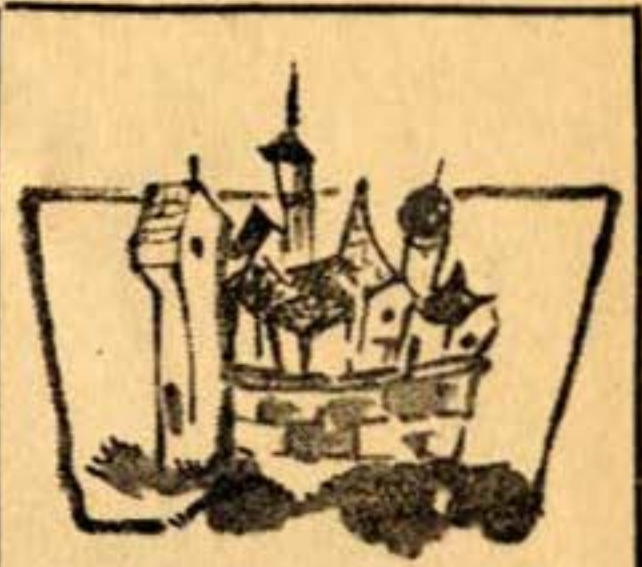
信州信濃の・・・

・・・善光寺

小野佐世男

夕立雲はモウ黒姫戸がくしの峯
に消え、遠雷となりて耳にのこる
のみ、雨後の善光寺の境内はスガ
くしく清らか——。
常夜燈の灯が星の様にまばゆく、
モウ夕暮れた。
夕立にたい御堂ののきをかりた
まゝ、數刻、急にヒエビエと肌に冷
氣をおぼゆ。早く宿へかへつて一
はいやらう。

(繪並に文)



人間に酔へる時代

——人間學と淨土教の立場——

佐藤 賢 順

中世紀は「神に酔へる時代」だと言はれ、現世紀は「人間に酔へる時代」だと言はれてゐる。何事に於いても人間が本位となり人間が中心となつて、凡ての事が「人間」といふ視角から眺められ考へられる。人間——ギリシャ語でアントローボスといふ言葉は今の世紀の合ひ言葉であるかの觀がある。若し天上ばかりを仰いで歩く人と、地上ばかりを凝視してゐる人とに分けることができると思へば今の世紀は地上に眼を俯してゐる世紀といふことができよう。

もともと、かういふ人間本位の時代は、偶然に起つたものではなく、長い間の歴史的な背景を背負つてゐると共に、プロタゴラスの「人間は萬物の尺度なり」以來、流星のやうに、一瞬の光芒を惹いてゐる。中世紀の神本位主義が、人間の自然理性の目覺めと共に、その神の理念が餘りに架空なる樓閣であることを批判されると、遂に信仰と知識とは一體であることができなくなつた。人間理性の自覺

は、やがて信仰と知識との分離を促して、知識は信仰を置き去りにして、獨力で急ぎ足に歩み出した。理性の曙、それが文復興である。神や法皇や教權が段々薄れていつて、ヒューマニテイ（人間性）がクローズ・アップされた。人本主義はこのやうにして、神の榮光から眼を覆ふて、自然の人間に存する榮光を見出すことを使命としたのである。

デカルトの「我疑ふ、故に我考ふ、故に我在り」と言ふ命題は、周知の如く彼が辿りついた思索の歸結點であると共に、そこから彼の思索體系が發足した出發點であつたが、それはまた近世並に現代の人間本位主義の出發點でもあつた。自我の思惟と存在とを凡ゆる思索の始點とすることは、すなはち、人間中心主義の先づ第一の前提でなければならぬ。勿論、疑ひと思惟とを思索の出發點としたものには、中世紀の始めに既にアウグスティヌスがあつた。然しア

ウグステイヌスの思索は、たとへてカルトのやうに「我考ふ、故に我在り」を出発点としたとしても、人間は神によつて創造せられたといふ信仰から離れることはできなかつた。然るに近代的人間中心主義の發足は正に純粹に一個の自然的存在としての人間の理念から、爲された所に著しい特色が存する。

カントの理性批判から輝かしく展開された主観主義は、人間本位主義的特色を最も明瞭に代表するものと言へよう。カントの主観主義は、ヘーゲルに於いて一見するところカントとは逆な思想體系に發展したかに思はれるが、ヘーゲル批判をやつたフオイエルバッハによつて、人間本位主義的立場は取り戻されて、それが一つの獨自な立場となつた。人間學が即ちそれである。

今世紀に入つてから實用主義、人本主義、器具主義などを稱へる一聯の思想家達に、人間の理想が中心的事であることはこゝに書くまでもない。然し深い反省と精緻な分析とを経て、理論的に整備された人間本位主義は、現代のエクジステンツイアリズム（實存主義）に求められるであらう。これには所謂人間學も所謂基礎的存在論も悉く含まれる。實存主義は廣義の人間本位主義である。エクジステンツといふ獨逸語に自覺的な存在者といふ特別の意味を持たせた所に、現代の人間學の特色が窺はれる。エクジステンツには元來、自覺的とか意識的とかいふ意味はない。然し人間を自然的な一般の存在者（ザイエнде）から區別して、意識的内包を有する存在

者、自覺存在者、覺存などといふ意味を持たせて、人間の宇宙に於ける地位の定位づけを行つたところに、現代人間本位主義の特色があるのである。近頃は自覺的存在者などといふ譯語が殆んど一般に通用してゐるが、自覺といふのは勿論、その語の嚴密な、反省哲學的な意味に於いて理解されるべきではなく、意識的といふ程度の軽い意味に解されてよい。

さてこの人間が自覺存在者である點に、即ち意識的内包を有するところに、人間學と宗教との結びつきが、再び求められるのである。

×

人間學とは何か。人間學といふ學問は時々誤解されて、一人前の人間になる爲めの學問、處世學といつたやうに倫理的な意味に解されることがある。然し茲で言ふ人間學は全くそれとは異つてゐる。人間學（アントロポロジー）はアントローポス（人間）のロゴス（思惟、學問）である。アントロポロジーは人類學と譯されて、エトウノロジーと同じ内容の學問と解される場合もあるが、茲で言ふ人間學はそれでもない。

極めて一般的に言へば、人間學は凡ゆる方面から人間を研究する學問である。凡ゆる方面からと言つたところで漠然としてゐるから大きく分けて形に現はれた方面からと形に現れない方面からとの二方面から人間を研究して、宇宙に於ける人間の立場を定める學問であると言はう。そして形に現はれた方面からとは、人類學的、民族

學的、歷史學的、生理學的等々の科學的な諸領域からの研究であり形に現れない方面からとは、人間の本質とか内面性とか精神性とかその精神的能力の可能性の範圍とかの哲學的な研究である。であるから、人間學は人間の科學と人間の形而上學との二方面に分けることができる。

人間の科學の立場から眺める時は、人間は單に最高度に發達した有機體に外ならない。それは他の諸動物と同じく一個の自然的存在である。科學の對象としての人間は、シェーラーの言葉を借りれば「道具を使ふ動物」、生物學的には既に發達の極點に達して「袋街に

はいつた動物」である。然しかやうな見方に留る限り、人間を依つて以つて他の存在者から區別する標識は求められない。こゝてわれわれは人間の科學と、袂を分たねばならない。

人間は生物學的に見て袋街にはいつた動物ではあるが、それはやがて自らを超出して、生物學的、自然科學的な生を抜け出るところに、すなはち精神性、内面性、人格を持つところに人間の人間たる所以が存する。人間はかやうな無限性を可能的に内包した有限者である。人間は神への跳躍板である。人間は小さい宇宙である。生の流れに於ける神の現れ！それが人間である。など、色々な言葉で言はれるであらう。このやうに人間の精神性を絶えまなく追求してそれがやがて神と相觸れるところを、求めてゆくものは、人間の形而上學に外ならない。既に物故してはゐるがシェーラーの哲學的人

間學は、正に現代のかゝる思想の代表的なものである（シェーラーの哲學的人間學に就いては「理想」第四十一號「現象學派の哲學」收載の拙稿に詳述してある）。既に述べた、人間は自覺的存在者であるといふ意味も、この人間の内包性、精神性の提示に外ならない。

こゝで注意しなければならないことは、フオイエルバッツハの人間學は、神と言ひ天國と言つても結局は人間の願望の投影である、との見地から、神學を人間學に、神の本質を人間の本質に解消して、天國から地上に降りてきて、「人間に醉へる時代」の先驅をなしたのであるけれども、かゝる立場に留る限り、遂に自然的存在者としての人間を抜け出ることとはできないが、最近の人間學は寧ろ、形而上學、宗教への前階を爲してゐる、といふ點である。すなはち、人間を自然と神との中間者である。自然的存在者でありながら、それは無限の可能性を内包してゐる、瓦礫にもなり覺者にもなりといふ活殺の自在性を有つ、と考へる點である。

×

以上に於いて、甚だ粗笨ではあつたが近頃流行の人間學についての一通りの解説を終へたつもりである。興へられた紙面が少ないので、このやうな意味の人間學に對して淨土教は如何なる立場にあるか、またあらねばならぬか、に就いての解説を急がねばならない。現代の人間學は、畢竟、人間の能力を甚だ高く評價してゐる。換言すると自然と神との、瓦礫と覺者との、中間的地位を人間に與へ

つゝ、やがて人間は自らの思惟と實踐との力によつて、自らの持つ無限の可能性を開闢するこの出来るものと認める。かやうな人間の把握は、人間を「考へる人」として把えるのであつて、ギリシヤ的に甚だ明朗で且つ樂天的である。然し乍ら、その明朗さは、たゞ概念的に明朗であるだけのことである。考への上では、人間はその内包性として甚だ高貴な特性を具へ、それを自由に開闢してゆくやうに思はれるといふだけの事である。自然的な條件に束縛されてゐる現實的な人間、言ひ換へると煩惱具足の凡夫が、包み覆はれてゐる無限に貴い本質を、すなはち佛性を開闢してゆくといふことを、概念的に肯定するだけの明朗さである。煩惱即菩提、この命題の「即」の意味を概念的に理解して、煩惱と菩提の二元を、すなはち現實と可能の二元を、一元として融合させてゐるだけのことである。佛教に於いては、この「即」といふ繋辭ほど重要にして且つ困難な言葉はない。科學的な命題であるならば、「煩惱は菩提である」などとは「黒は白である」と言へないと等しく、如何なる場合にも言はれない。然るに相矛盾するものが、たゞ體驗に於いて味識されて、相即する所に佛教に於いてのみ許される「即」の意味が存する。けれどもこのやうな體驗は殆んど全くと言つても好い位、架空な事實に過ぎない。結局二元は二元であつて一元に相即することはできない。現代の哲學的人間學はそれが相即すると考へるところに、概念的明朗さがあるだけである。聖道門系の佛教は恐らくは、人間學を援用し

これと提擧することはできるかもしれないが、少くとも淨土教の立場は他の仕方について人間を把握しなければならぬ。

それは「考へる人」「思惟する人」として人間を把えることから離れて、「信ずる人」として人間を把えることである。かやうな人間の解釋は、考へる人としての人間を眼を覆ふて全く見ないのではなく考へる力をも含めて、現實に存する人間の實相を如實に眺めることに出發しなければならぬ。

具體的な日常的な人間をありの儘の姿に於いて眺めるとき、男も女をも含めて、また現實の人間の光背となつてゐる凡てを取り除いて考へるならば、そこに現はれるものは「はかなさ」である。「はかなさ」は頼りなさ、弱さ、こゝろもとなさなど、同列の理念であつて、それは罪の自覺と密接に結びついてゐる。人間をたゞ「考へる人」として把えてゐる間は、このやうな「はかなさ」といふ視點は生れないが、人間を具體的に把えて、本能や感情や欲望を本來具へたありの儘の日常的人間を眺めるとき「はかなさ」と「罪」の意識が必ず生れなければならない。

現代の人間學は人間學に終始することができず、それは結局形而上學や宗教への前階をなすものであることは、既に一言したが、たとへ人間學がかゝるものであつても、淨土教の立場は、人間學の立場とは別の所に、寧ろその人間解釋を超えて日常的人間を把えるところになければならない。淨土教は「人間に醉へる時代」を更に轉迴させなければならない。(「理想」五十五號拙稿「佛教の人間論」參看。)



1

二重 險

長 田 恒 雄

「うん、今度のボオナスでやらうよ。きつと凄くなるぜ。」

ちひさな三面鏡のまへで、もう一時間も化粧してゐる千満子のうしろから、良人の恭介は聲をかけた。

「おい、いゝかげんにしないか。おそくなつちまふよ。」

「ちよいと、こゝへいらしてよ。」

背後に立つた良人をふり仰ぎながら、千満子は二本の指で險をひろげて見せ、

「ね、こんなに大きくなるのよ。早く手術したいわ。」

と、媚びるやうに微笑んだ。

恭介も、いつもそれを考へてゐたのだつた。どこと非の打ちどころもない千満子の整つた貌の中で、あまりに細い二つの瞳がいつも氣にかかつてゐた。そして、有名な女優などが、次々と二重險の手術をするのをゴシップ記事で讀んだり、手術前後まるつきり人が變つたやうな寫眞を見たりする度に、夫婦の話はそこへおちて行くのであつた。

「あたしだつて、こゝだけ人なみになればさう見捨てたもんぢやないわね。」

千満子は、またしても鏡の中へ顔をうづめるや

自問自答

或る日日本人が倫敦の一流旅館に宿をとつたと思ひ給へ。夕食の時間、タキシードかなんか着込んで自分では一つばし板についてゐる心算で、悠然と廊下づたいに食堂の方へ歩いて行つた。

と、薄暗い廊下の向ふから、こつ

ちを向いて矢張りタキシードを着た男が、これも悠然とやつて来る。そ

の身體付きがどうも日本人らしい。

丈のちんちくりんな處から、板につ

かない服の着こなした、黄色い顔……

日本人と云ふのはどうしてから不格

好に出来上つてゐるのだらう。その

癖、妙に氣取つて自信あり氣に、すま

して歩いて來るところは、とても見

られたさまではないわい。西洋人の

間に入ると遺憾乍ら我々の仲間、

うにして、毛ピンで險の皮を吊りあげて見たり、無理に瞳を見ひらいてみたりしてゐた。

「もういゝよ、手術をすればジョン・クロフォードを見返すやうになれるよ。そろそろ御興をあげてくれよ。」

やつと立ち上つた千満子は、それでもいつまでも眼の話をやめなかつた。毎日のやうに新聞に出る××眼科の整形手術の廣告が、彼女の願望を日毎に募らせてゐたにちがひない。婦人雑誌などに出るインチキな器械などの廣告も、彼女は一字あまらず讀んでゐた。そして化粧のあとでは、きまつて險をいぢつてゐるのだつた。恭介も、いつか人並以上に女の瞳が氣になるやうになつて、ばつちりと二重の險が深い溝を刻んでゐる美しい女性を見ると、いつも千満子の願ひを思ひ出すのであつた。

しかし、百圓にも満たない彼の俸給の中から、その手術料五拾圓を捻出することは容易ではなかつた。年に二回のボオナスも、それからそれへと使ひ途がありあまるほどあつて、餘分なものは浴衣一枚買へる筈もなかつた。従つて妻を美しくす

る大事な事業にも仲々着手できずにゐたのである。とは言へ、いつまでも話ばかりしてゐても仕方なかつた。なんとかして、此の次のボオナスからは、その事業に親ちたいものだ、と、恭介も本氣で考へてゐた。彼等は、まだ子供もない若夫婦だつたから。

2

休みの日の、二人きりの街歩きは、彼等をすっかり幸福にして、さつきの話など忘れさせてしまつた。彼等はデパートへ寄つたり、キネマを見たり、銀座でお茶をのんだりして、彼等の生活とは全く縁のない豪華な世界を覗きながら、それだけで充分にたのしかつた。しかし、彼等が少しばかりの買物を提げてバスに乗ると、突然千満子はおどろいて聲をあげた。

「あら。」

「しばらく。」

恭介には、ちよつとわからなかつたが、そこには華やかな表情が花ひらいてゐた。なによりも、くつきりと彫つたやうな大きな瞳が彼を射た。千満子はたちろぎながら、

肉體的に引け目を感じる……。と、その男は向ふから来る、も一人の日本人を見て、一種の侮蔑を感じながらつく／＼そう思つたそうである。

ところが、段々歩いて行くと、向ふもこつちに氣が付いたらしく、まじ／＼とこつちを見ながら、相變らず悠然たる足どりでやつて来る。と廊下の眞ん中でこの二人がばつたりとぶつつかつて仕舞つた。その男は、はつとした、こんな氣まりの悪い思ひをしたのは生れて始めてだつたそうだ。

何んぞ計らん。そのちんちりん、なみつともない日本人こそ自分自身であつて、向ふから来るのだとばかり思つてゐたのは、その廊下の端に嵌込んであつた大きな姿見に映つた己れの姿に外ならなかつた。……のだとは洋行歸りの知人の體験談である。

「ずいぶんおかはりになつたわねえ。」

と歎息をもらして、吊革を持つのも忘れて車の動揺によるめいた。

「さう？」

ちよつと首を傾けた顔は、誇らしげに微笑んでゐた。よく見ると、それは五十嵐夫人なのであつた。恭介も、やうやく氣がついて挨拶した。

「やあ、これはすつかりお見それしちまつて。」

「まあ、いやだわ。」

恭介は、ちらりと千満子を見かへり、彼女の寂しげな表情に出會はすとあわてて眼をそらした。

五十嵐夫人は、千満子の女學校の同窓で、結婚後も往來してゐる僅かな友だちの一人であつた。

そして「シヤム人形」とあだ名で呼びならしてゐ

た人だつた。シヤム製の玩具の黄色いちひさな象

それは五十嵐夫人の全體から來る印象ではあつた

が、なによりも、千満子にも負けないほどの細い

小さな瞳が、そのあだ名を生々させてゐたのだつ

た。そして、彼女はいくたびとなく、その小さな

眼について話し合つたことだつた。二人とも結婚

してしまつてからも、その話は會ふたびに繰りか

へされたにちがひなかつた。一度など、五十嵐が

わざわざ恭介に「女房が二重瞼の手術をやりた

い」と言つてゐるんだが、お宅でもなさるといふ話だ

けれども、どんなものだらうか」などと、眞面目

に相談を持ちかけて來たことさへあつた。恭介の

方はどちらかと言へば、千満子の希望を一も二も

なく通してやりたいと思つてゐながら、たゞ經濟

的な事情からそれが許されずにあると言ふだけだ

つたので、その時も五十嵐に是非させてやれとす

ゝめたものだつた。

ところが今、恭介の前にゐる五十嵐夫人はもは

や「シヤム人形」ではなかつた。鮮かに加工され

て、大輪の花のやうに見開いた二重瞼は、顔全體

を明るく照らし出して、どこか近づき難いやうな

美しさに見せてゐた。

「まあ、とてもいいわ。」

千満子は場所柄も考へないで、無遠慮に五十嵐

夫人の顔を眺めてゐた。夫人は少ししてれて口を歪

めて笑つた。

「まあ、よしてよ、困つちやうわね。」

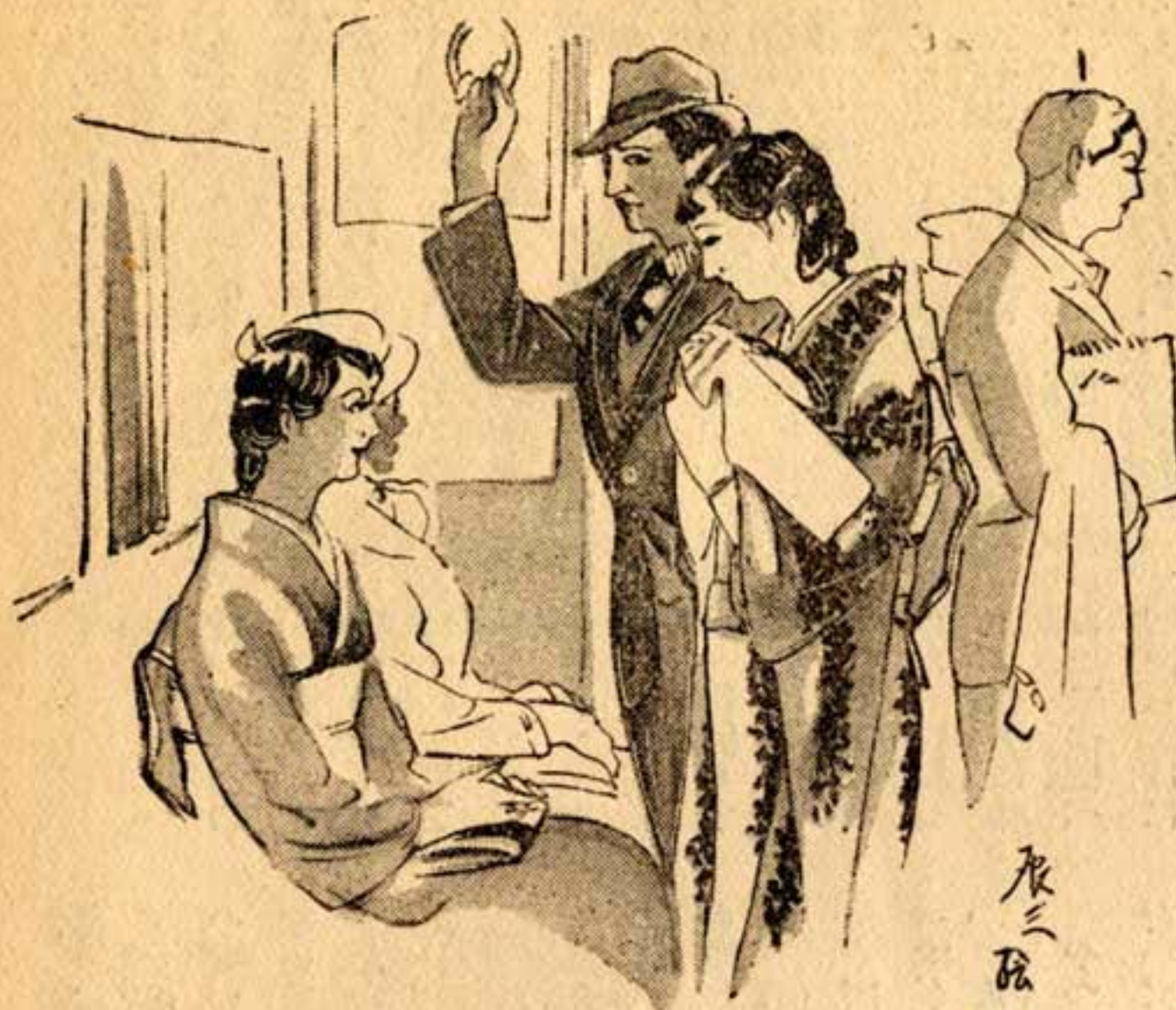
「あら、ごめんなさい。」

金貸は盲人のもの

喜八郎の發奮

十七の時、續けさまに兩親に死別した質屋三男坊の鶴吉、親類も縁者も近所の人達も云ひ合せたやうにそつてなくするのが不平でたまらない。「あゝ、こりや今迄のやうにのんきにしてはゐられない。よしッ！ 俺も男だ。江戸で一旗擧げて來やう」かう腹をきめると直ぐに越後新發田をあとに江戸へ向つた。さて、江戸は流石に土一升、金一升、まご／＼してゐると何處へつゝ轉がされるか分らない。氣の強い鶴吉もボンヤリしてはゐられなくなつた。

『國を出る時持つて來た百兩の金、



やつと氣がついて千満子も顔をあからめてどう
しても訊ねずにはゐられないといった風で、

「いつなさつたの？ 痛かつて？」

などとたてつけに質問を浴びせかけてゐた。

「それや、ちよつと痛いけれど、兩方で二週間か
ゝれば出来るんですもの。お子さんがあるんぢ

やなし、譯ないことよ。」

「さうね。それぢやいゝわね。」

千満子の表情が、だんだん沈んでゆくのを恭介
は氣の毒にも思ひ、あさましくも思ひながら、知
らん顔をしてゐた。

「富子さん、とても變つちやつたわね。立派なも

んだわ。今度のボオナスで、きつと

ね。雖ついちやだめよ。」

歸つて來てからも、千満子は五十嵐夫

人のことばかり言つてゐた。恭介もいち

らしくそれを聴きながら、また、手術の

美しくなつた妻を想像して、ひとり微笑

むのであつた。

3

それから、二週間と経たないある朝の
ことであつた。祭日で、おそい朝食の卓

に向つてゐる恭介たちのところへ、たゞ

ならぬ氣配で五十嵐がやつて來た。いつ

もの明るさはどこにも見られず、荒い呼

吸を強いて抑へつけてゐる様子が苦しげ

に見えた。

これとても座して食へば山をもと云
ふから、何んと利殖の道を講じなけ
れやならねえが。身の振り方はそれ
からだ。」

心に問ひ胸に答へて、宿の亭主に

『御亭主、こゝらにお金を預かつて

くれる人はあるまいかの？』

ときいた。

『ありますよ。何んでも小石川邊に

盲人で佐藤檢校(佐藤正興氏)の父

とか云ふ人が預かるて話だが。』

『そりやいゝ事を聞いた。それじや

一つばしり行つてこやう。』

氣の早い鶴吉。小石川へ出かけて

佐藤檢校を捜ね廻つて漸く見付け

出した。

『俺アちつとばかりお金を持つて來

たんだが、何んとか利子の附くやう

にと、いろ／＼人に聞いて見たら、

お前さんがさうだつてんで、わざわざ

ざやつて來たんだが、どうか面倒で

「どうしたんです？」

「それが、實は、——」

五十嵐夫人は、久しい間の念願が叶つて、その細い眼を手術すると、急に家に落着いてゐられなくなつたものらしい。毎朝、ながい間鏡の前に坐つて、睫毛にヴィウラをかけて念入な化粧を済ますと、誰かに、その變貌を見てもらひ度くつてたまらず、デパートへでかけ、夜は夜でダンス・ホルへでかけるやうになつたのだと言ふ。そして如何に彼女が浮ついてゐたかは、僅か一週間もすぎないうちにダンス・ホルで知り合ひになつた青年と、五十嵐には内緒でビクニツクに出かけた。りしたこともでも知れるといふのであつた。狼狽した五十嵐が叱言を言つても、まるつきり相手にせず、急に美しくなつた瞳に、こないだまでは泛べることもできなかつた微笑を泛べて、誇らしげに出かけてしまふと言ふのであつた。そして、昨日五十嵐の留守に、突然家出してしまつた、と彼はすつかり打ちひしがれて話したのである。残された手紙には、「自分は長い間の願ひがかなつて、與へられた美を生かすことがやうやくできた。これをこのまま埋もらしてしまふのは、自分に對して

餘りに残酷だとおもふ。幸ひ自分の美しさを認めて女優にしてやらうといふ人が現はれたから、この機を遁さずやつて見る積りだ、どうか悪く思はないでくれ、スクリーンでおめにかゝることがあつたら、いつでもあなたの好意を忘れないでゐる富子を思つてゆるしてくれ。」ときはめて蠟のいゝ己惚れたことが書かれてあつたと言ふのである。

恭介夫婦もこれには啞然としてしまつた。それに恭介には手術を勧めた責任もあり、更にまた、もつと問題は身に迫りかねないことでもあつたので、何とも言ひやうのない氣持で、五十嵐の話をきくばかりであつた。

「すぐ夢がさめると思ひますよ。手をつくして待つ外はないと思ひますね。」

やつとそれだけ言ふと、たゞ黙りこくつてうつむいてしまつた。五十嵐も八方手がかりを探してゐるが、全くどうしてよいか解らないと言つた風で、悄然と、愚痴をこぼし乍ら歸つて行つた。

その寂しい後姿を見送りながら、恭介と千満子それぞれ別々な感懷を抱きながら瞳を合せた。

「富子さん、いさましいわね。」

「ウンでもシヤム人形の方がかあいかつたなあ。」

もこの百兩を預かつてくんねえかの。」

これを凝と聞いてゐた檢校「おい若い人、おやめなされ。金貨など云ふ商賣は、ホンの盲人のすることだ。お前さんのやうな働盛りの人達が首をつつ突む仕事じやないよ。お前さんがその若さで江戸へ出て來なすつたのは、よつほどの覺悟があつたからだらう。その意氣で商人におなりなさい、辛棒一つで錢屋五兵衛にも紀國屋文左衛門にもなれるのだ。あの人達だとて神様でもなんでもない。自分の力でたゞき上げた人達だ。そのつもりで確りおやりなさい。」

この一言に覺然として夢からさめた鶴吉は、呉服屋——魚や——羅紗や——御用商人、——かくして往年の鶴吉は大倉喜八郎となつて、日本の實業界に一方の覇をとへた。



講 談

無 筆 の 祐 筆

きたむら・いちろう

小 野 佐 世 男 畫

播州赤穂五萬三千石淺野采女正長友、この方は内匠守長矩のお父君に當らせられるが、この殿様がこの度新規浪人を御召抱へになつた。お役は祐筆、祐筆と云ふのは文書を掌るとありますから、今の書記見たいなもの。この浪人が祿を頂戴して愈々出仕と云ふことに相成りました。唯今も昔も同じやうなもので、新任の挨拶を済ませて、定められた机に向つて愈々祐筆のお役に就くと云ふ段取り。そこで祐筆頭、今で云ふ課長さんが文案を認めまして、新参者のところへ持つて参りました。

『君、これを一つ清書して呉れ給ひ。』

『私がこれを書くので？』

『きまつてゐるじやないか、君に書かせ度いから君の處へ持つて來たんだ。仕事始めだ。腕を振るつて書いて呉れ給ひ』

『御免を蒙ります。』

『御免蒙るつたつて、別に難しいものじやないよ。この通りに清書して呉れ、ばいゝんだ……。それとも僕の文案が氣に入らないとでも云ふのかね。』

『そんなことはありませんがね。』

『それじや書いて呉れても良いだろう。』

『ところが書けません。』

と云ふ譯で二人が妙な押問答を始めました。

祐筆頭は自分がなめられたのだと思つたから到頭茹蟄見たいに見る／＼眞赤になつて仕舞

つた。怒り心頭に發すると云ふ奴。

『け、け、怪しからん！ 君は僕を愚弄するのかッ。』

『とんでもない。愚弄する譯じやありません。本當に書けないんで。片方は相變らず済ましたもの。』

『か、け、な、い？ 然し君のお役は祐筆だぜ。』

『さ、その祐筆が實は無筆なんで。』とけろりとしております。

これには流石の祐筆頭も呆れてしまつて、ボカンと開いた口が塞がりません。五分間ばかり經つてやつと意識を恢復して

『無筆でこの大切なお役に就くとは、上を僞る不届者、祿盗人だ。その旨早速重役に申し聞けねばならぬが、それでも良いか。』

とまだ半信半疑で念を押して見たが、相手はさつぱりしたもので、

『手前の無筆は神かけて偽りでは御座らぬ。』

『どうしても御自由になすつて下さい。』とすましております。

祐筆頭もかうなつては仕方が御座いませんから重役衆に

『此度新規御召抱への祐筆は無筆で御座いまして、これを有筆と僞つてお上に御奉公申上げた不届者』と云ふ下手な洒落みたいな報告をいたしましたから、御家老始め重役の方々も大きに驚き、早速御前に於て直々の御取調べと云ふことに相成つた。

『こりや、新參者の祐筆、いや無筆。』殿様も間誤付いております。頭を上げよ、その方は無筆でありながら、當家を僞り仕官いたしました由であるが、それは眞か？ 流石に殿様で頭から嚇かしません。先づ本當か嘘かとお尋ねになる。こつちは平蜘蛛のやうにへえつく

ばつておりましたが、恐る／＼頭を上げて『全くそれに相違御座りませぬ。お上を僞りましたる罪、如何様なりとも御處分下さります様。』と唯恐入つております。

『さても圖々しいインチキ野郎。』なぞとは申しませぬ。眞とあらば由々しきこと、武士にあるまじき振舞ひなるが、然しか程までにい

たして當家に仕官を望めるは、定めし深き仔細のあるならん、逐一これにて語り聞かせよ。』と芝居が、り。餘程情の厚い殿様と見え

まして、被告人に辯護の餘地を與へました。『有難き殿のお情。お言葉に甘えてこの場で仔細申上します。』とはらはらと涙をこぼしまして、『手前の父祖は、仕官の砌差出しましたる由緒書にも御座います通り、代々の小祿者その件に生れました私はまたかゝる不器量者にていづ方にも召抱えられる望みも御座りませぬ。さればこの儘浪人にて相果つるは必定斯くては祖先に對して面目次第も御座りませねば、一策を案じ、かくは手跡を僞つて當家へお召抱へと相成りましたる次第。事曝れて死罪を賜はるは兼ねて仕官以前より覺悟いたしておりました。何卒御情けを以て切腹賜はるやう。たとへ切腹いたして相果つとも、一日なりとも赤穂五萬三千石の藩士となつたる上は、最早浪人にては無之、知行の主の御座りますれば、冥土へ参りても祖先へ土産が御座ります。何卒切腹賜へかし。』

と既に死を覺悟いたしておると云ふ面魂
で申上げました。見ると、今にも諸肌ぬいで
御前で本當に腹を切り兼まじい行装ですか
ら、驚いたの
は重役の面々



SASEO, O

えらい奴が飛び込んで来た。飛
んでもないものを冥土の土産に
しやがる、どうしたら良からう
と唯恨へておるばかり。
これをお聞きになつた采女正
長友、つく／＼お感じ遊ばされ
た御様子で

「近頃就職難がひどいとは聞い
てゐたが、こんな新手を編み出
すやうでは餘程のことだな。」と
せちがらい當近の社長なぞだと
云ふところですが、兎に角五萬
三萬石のお殿様だ、思ひやり
があつて、おつとりと出来上つ
てゐる。

「上を欺く所行は憎むべし、さ
れどその心根に到つては不便な
るものである。切腹申付くべき
奴なれど、親を思ひ、祖先を思
ふ心根に免じ、この度は見逃し
て仕はす。随分忠勤を勵むがよ

からう。」

と云ふので、御前のお許しが出て、その儘
お召抱えと云ふ事になりました。喜んだのは
無筆者で、呆れたのは重役衆や課長さん達、
恐ろしく押し強い執職職術があつたものだ
と唸つた切りで屢々は腰が立たなかつたと云
ふ。

これが後に四十七士の一人となつて、忠臣
義士の名を一世に高めた堀部彌兵衛青年時代
のエピソード、義士外傳は堀部彌兵衛無筆の
祐筆。一席の讀切で御座います。(おはり)

一口ばなし

◇裁判官——被告は時計を盗んだと：

なぜそんなことをした？

被告(暫くためらつてゐたが)——た

いその、時が知れたかつたからなんです、
ほかにどうのつて……

裁判官——宜しい、時を知らせてや
る、五年間だ！

信 仰 相 談

眞の法悦とは？

(問) 信仰とは一つの宗義におさめられた謂はゆる型にはまつた信仰を言ふのでせうか。

私は信仰と云ふものは、もつと自由な廣いそして力強い人世の歩みのやうに思ふのであります。宗義にとらはれた信仰、それは今の私には何等の指導をも與へては呉れないのです。先生、私は今の社會を見るに就き、もはや貴族的な宗義を以つて起つ勇氣を失ひました。宗義を離れては眞の法悦を得る事は出来ないものなのでせうか。御指導願ひます。

(大阪生玉 A日生)

(答) 型に嵌まらぬものが世の中に存在するでせうか。寝る事、起きる事、食ふ事、勉強する事、人と交際する事、社會に處して行く事、文字から言葉から行爲から心の變化から一切合切型に嵌まつて居ないものはありません。また學ぶと云ふことは

「眞似ぶ」ことです。即ち先人の努力して得た結果を型通り一應其儘自分の中に取入れることです。然し取入れたからと云つてそれが生活にならぬ限り、まだ本物ではありません。

一體、淨土の宗義は法然上人の信仰内容を言葉や文字に表現したもので、一つの型である事には相違ありませんが、それが今日も尙ほ連綿として傳持されて居るのは、其宗義に永遠の光があり生命があるからで、若し既に生命が失はれて居るのなら今迄持續されもしないし、とうの昔に亡びて居たことでせう。

あなたは教義を學んで、それを以て直ちに社會に討つて出やうとする爲に、不安を御感じになつて居るのではありませんか。それは畢竟眞似事を以てそれで本物のやうな効果を占めやうとして居るのですからいけないのでせう。それは、自分が信仰に入つて其信仰と宗義と何う違ふか、若し違つて居るなら何故に違つて居るのか、時代の相違からか、或は自分の信仰がまだ足りないからか、と云ふやうに自分の信仰を正しきものにする爲に、何んなに宗義が必要であり大切であるかを知ら

ないからです。畢竟信仰の體驗なしに、心配して居る取越苦勞なのです。

私は宗義は絶大な指導者と思つて居ます。あなたが本當に信仰を求められつゝあるなら貴族主義の何のと云つて毛嫌ひなさる筈はないと思ひますが、傳統尊重論者の頑強さに對する一種の反動感情からそんな風に思つて居られるのではないですか。

まあ、だまされたと思つて、夜でもよいから一人で念佛に専心して見て下さい。そして念佛に熱が出て來たら、一週間位ぶつ通しに念佛して下さい。それで何か知ら一つの體驗を得て信仰に入り得た自覺が出來たら、一應自分の氣持を紙に記して見て下さい。其上で「選擇集」とか「授手印」とかの主要な宗義書を読んで見て下さい。自分の信仰と何處が異つて居るか御分りになるでせう。そしてそれらの書物が相當に自分の血となり肉となつて呉れるかを、新たに發見されることでせう。然し不幸にして信仰に入り得なかつたら、入り得る迄念佛を續けて下さい。死ぬ迄續ける決心でやつて見て下さい。あなたは僧侶なのですから一般人以上に苦心を要するでせう。な

信 仰 相 談

あに短い一生ですよ。此一生を念佛で過すのもまた面白いではないですか。あなた一人位そうした念佛マニアが存在して居るのを面白いとは御思ひになりませんか。

信仰は一筋道です。自由と云つたとて能率の上がない無軌道で歩くと云ふことではありません。分らなかつたら尙ほ御尋ね下さい。あなたのやうな眞面目な青年は屹度信仰に入れることと思ひますから。(中村辨康)

除き度い死の恐怖

(問) 先祖傳來、淨土宗の念佛に生かさして頂いて居ります、母も明暮念佛して心楽しく一生を終りました。そして母の死後、やはりその信仰が引續いて、私に相續さして頂けたことは、決して只事でない尊き御因縁に因るものと深く喜んでゐるものであります。木魚の響と大聲念佛に日々家庭人

心の淨化をはげみ、絶へず念佛にいそしんでゐます。しかし只こゝに私の心中、時々淋しきものがあります。それは死です。何人も免れることの出来ない必然的なものと知りながら、餘りにも哀れな、どうすることも出来ない、いみじめさ、それが私にはとても痛切に感じられ、然も嵐のやうに捲き起り、何だかじつとしてゐられない程心の動揺を來すことがあります。こうした死への恐怖、それは念佛を信ずる人にあり得べきものでないとは思ひますが、先生どうかお教へ下さいませ。

(直方 一峰)

(答) 「死」を恐れるのは生物一般に持つて居る最も根本的なもので、人間としても當然な氣持です。漱石の虞美人草にも甲野さんの言葉として「人間は多く喜劇だが、死を思ふ時のみ眞面目になる」と云ふやうな意味のことを云つてあつたと思ひます。もし人間に死の恐怖が無かつたら、恐らく正しい宗教も有り得なかつたでせう。昔から信仰に入る動機として「無常觀」と「罪惡觀」とが云はれて居りますが、死あればこそ五十年の人生が貴いのであり、また其の貴い人生を本當に生か

さうとする努力も行はれる譯です。

但し大悟徹底すれば「死生何ものぞ」と死を視ること宛も歸するが如く、死に臨んでも泰然自若として平氣で居られると云ふ事を申しますので、信仰に入れば誰でもさうなるのが本當だと思ふのも、無理ではありませんが、チャンと筋道が立つて當然死が免かれな

いと知る場合なら、誰でも覺悟は極めるでせうが、例へば狂人があつて兇器を振り廻して荒れ廻つて居る所へ「死を視ること歸するが如し」と云つて、訥々殺されに行く馬鹿はありません。そんな事までも「死生何ものぞ」の範疇の中に入れる譯には行きません。信仰人と信仰人でないのとの相違は、死に對して狼狽するかしないかにあります。信仰に入ればおのづから「緣起」の理も分り、一切を如來様にまかせて居ますから、緣盡きれば如來様が引取つて下さるものとの確信の下に落着いて精神的苦痛からのがれることが出来ます。何んな器物でもそれがまだ有効に役立つ限り、之をごみ箱に投捨する事はないと同様に、私達が世の中の進展に少しでも寄與して居るならば、此身體が老衰して役に立たなく

信 ・ 仰 ・ 相 ・ 談

なる迄、屹度如来様が擁護して下さいませう。役に立たなくなつて死ぬなら少しも惜しまないでせう。

自分が世の中に居ても畢竟穀つぶしで何の役にも立たぬなら長生きの望みは少し贅澤過ぎますよ。然し信仰に入る限り其人はもうすつかり如来の子として生れ變つて居るのですから、屹度世の中の爲の仕事をするのとせう。御心配なさるな。心配する暇に念佛に専心して下さい。では悪人が何うして長生きするかと云ふ疑問も起りませうが、それはまた別の理由があります。但し悪人は長生きすればする程精神的苦痛をより多く嘗める筈で、信仰人の精神状態とは雲泥萬里の相違で比較にはなりませんよ。(中村辨康)

積極道の念佛

(問) 中村辨康師の『一枚起請文』御講義中にある「積極道の念佛」について、より具象的な御明示を願ひ

ます。自力をすてた他力任せに何處に力強い念佛、力の養はれる念佛がありませうか。單信南無の念佛し候後の念佛について御相談いたします。

(答) 佐藤さんへの指定質問が、私の方へ廻付されて來ましたから、私から御答へ申し上げます。

自力を捨てた信仰ならこそ本當の力強さがあるのです。自我の突張つた自利主義に何の力強さがあるものですか。若しあつたら自惚れです。日本の軍人が戦場に強いのも、自分を捨て、身命を君國に捧げんとするからです。念佛の信仰も如来の前に無我となり得るから強いので、かの山中鹿之助の「一番鎧は我慢にてはつけず、神號と共に突入れしが、助からんとする氣味ありて危し。死を決し南無阿彌陀佛の聲と共に突入ることを得たり」と云ふ有名な言葉でも知らるゝやうに、自力を捨てない我慢の何處に本當の力が出ませうか。

それは、結局鼻張りの力丈ではありませんか。自分を捨て、死生共にまかせ切つた心の持主にこそ本當の力が發揮されます。

また彼の大西郷の云つたと傳へられる「金もいらぬ名譽もいらぬ命もいらぬ云云」のことも自力をすてた無我の信仰を有する者に始めて其境地にあり得ると思ひます。

また「單信南無の念佛」とは色々な信仰を交ぜないことで、法然上人の謂ゆる「助させぬ念佛」のことです。よく世間にある「未來の爲には念佛、現世には神様」と云ふのや、むかしから念佛信仰の人でも「信仰の増進を祈る爲に他の佛神に參籠する」習慣がありました。それが、それなどもまだ二途かけて居る氣持が抜け切れて居ません。凡て念佛に統一されて行く一以て貫く信仰が本當の信仰です。試みに一時間程一人で念佛して御覽下さい。如何に一念を貫き通すことが困難であるか分ります。自力的な念佛が——何でもないやうですが——其實如何にむつかしいものが御經験されませう。之に反して雜念が起るにつけ妄念が起るにつけ、ますます拙劣な我身の一畝を任せて行く他力の信仰こそ、其人をして正しきに更生せしむるものです。徒らに穿鑿するよりも一日も早く信仰に入つて下さい。「信後の念佛」などはそれからの事です。

信 仰 相 談

(中村辨康)

知識階級の信仰は？

(問) 知情意三方面を完全に満足させるのが本當の宗教と聞きました。天理教では情の満足を得ても知的満足が得られない。無知識階級の信者ばかりを持つのは其處に原因があると思ひます。

しかし佛教的立場より説く三世因果(勿論天理教は之を取入れて教祖が説いた如く厚顔鐵面皮の説教をしてゐるが……)と靈魂不滅論は、小生は何ら教示を仰ぐ知人を持たざるためか現代の科學的教育を受けたものとして、知的満足が得られない様な氣がいたします。勿論大眞理である佛教に、知的満足を與へない所はないと思ひます。しかし私の友人某大學生も、之に就て知的な満足を持つてゐないことに徴しても、現代の青年の一般的傾向ぢやないかと思つて、

敢て一言質問申しました。(兵庫縣平井五郎)

(答) 佛教では因果を否定する人への鐵槌として一應因果論を云ひますが、更に因果を固執する者に對して緣起論へと導きます。因果論は科學の世界で、即ち主原因は必ず一定の結果を持つと云ふ几帳面な態度です。現代の物理や化學は皆な此因果論の建前です。然し事實は必ずしもそんな決定的な結果とはならず色々に變化致します。と云ふのは主原因だけでは結果は生じない。結果を生ぜしめる諸條件が具はらなければ、駄目だからであります。例へば或る草花の種があるとしても、其種丈では花は咲かない、種を蒔いて花を咲かしめるやうな色々な工作諸條件が必要なのと同じです。然し種其物には其花の咲く可き力が具備されて居ること無論です。それは伏能とでも云ふべき一つの力、若しくは傾向でせう。さうした伏能なり傾向なりは時間を豫想(致)します。時間なくして空間的な存在は有り得ません。既に時間が許されて居るならば過去と現在と未來とが許されてよい譯です。此過去と現在と未來とが擴大されたのが三世です。また緣起論の原始的なものは「十二因縁」

と云ふのがあります。之は釋尊が菩提樹の下に沈思せられた時、一體吾々の苦惱は何が原因かとそれからそれへと辿つて十二の段階を経、それは結局「無明」と云ふ「自分の生きることの分らぬ」ことが最後の根本原因であると云ふ事が發見されたのでした。之れ原始佛教の十二因縁です。それが支那に傳はつて「三世兩重の因果」と云ふ教判が出来たのでした。そして業力不滅と云ふやうな説明もなつたのですが、然しかうした問題は信仰上の問題ではありません。それは佛教學として概念上の知識です。即ち聖道門の學問で淨土門の教ではありません。淨土門では素直に有るが儘の事實を反省して如來の大慈悲によりがへるのです。拙い自分の事實に泣いて如來の慈光を仰ぐのです。眞剣な差しまつた當面の生活態度を更正することです。自分のなした惡因が悪い結果を將來せしめないやうに、如來の大縁(大きな條件)に引かれることです。さうした三世が何うの、因果が何うのと云ふ問題よりも、もつと直接した自分の生活に對する重要な事に解決を求めて行かうとするのが淨土教でもあるのです。但し、さうし

信 仰 相 談

たことも智識としては知つて置いて悪いことではないでせうが、かうした「信仰相談欄」などの簡単な紙面では説明し切れませんし、また信仰上の直接な問題でもないと存じます。法然上人の信仰はさうした概念上の事を捨て、居られます。も少し眞實な問題はありませんか。(中村辨康)

浄土門の慈悲

(問) 大慈悲も、聖道の慈悲と浄土の慈悲とあり、聖道の慈悲とはすべての物をあはれむとの事。

假説して申せば、或る知友の者その日／＼の生計に困り、兄は饑餓に泣く。彼はあるものに迫はれ勝ちである。このまゝ進めば一家危し、何とかしてやりたいが自分も餘りに社會的に力が無い。然も貧乏であると云つて、傍觀するのは辛い。では思ひ切つてある種の援助を致さうか。併し彼の仕事時勢かは知らぬが底なしの不況

である。稼いでも／＼生活難を破る事は出来ない。いくら骨を折つても焼石に水である。では社會の改造を待つか。そんな事は云つて居られない。危機は、足もとに火のやうに迫る。自分も煩惱に悩まされる。妻子の手前もある。是を大乗的にも考へられない凡夫である限り、妻子の手前は慈悲ではなく自我中心である。自我中心によるから聖道の願ひは中々以て至難である、はや彼は離散の憂目にあつた。南無阿彌陀佛。自分に非力なるが故に、浄土の御慈悲に慕ひ申させて戴くより外に道はない。何卒浄土門の慈悲を御高説下さい。

(京都市 清水秋香)

(答) 御尋ねの要點は聖道門の慈悲は自分でやるのだから困難でやれない。随つて浄土門は大慈悲に依りたいのであるがそれを云つて欲しいと云ふ事かと存じますが、如何でせうか。

慈悲と云ふ事に聖道浄土の區別はありませんが、御話しの聖道の慈悲と云ふのは菩薩の行爲たる六度(布施持戒忍辱精進禪定智慧)とか四攝法(布施愛語利行同事)とか色々ありま

すところの上求菩提下化衆生の爲に行ふもの總稱若しくは一部を指して居られるのかとも存じます。

佛教では慈悲に三種を擧げて居ります。一は衆生縁の慈悲、二は法縁の慈悲、三は無縁の大慈悲であります。衆生縁の慈悲は關係の深い近い人などの爲にするなだけで、一般人でも出來得る所のものです。二は菩薩などの行ふ慈悲で一切のものを縁として行ふ精神的な救済などがそれです。三は佛の慈悲で縁なきに行ふもの、丁度太陽の光線が四方に放射して居るやうな攝取力のことです。(浄土六門)眞野先生「愛の話」佛ごゝろの項を参照せられたし。

浄土教では此の佛の無限の大慈悲にすがつて、浄土に往生し速かに人格を完成して、佛の如き慈悲力を得、思ふ存分に慈悲が行はれるやうになりたいと思ふのであります。

信仰に入る事實は此如來の大慈悲に氣の付いた事なのですが、委しいことは此欄では到底云ひ切れません。いつか折があつたら申上げませう。(中村辨康)

(聖書に親しむ
教會の長老)



(裸足でも
勇猛な軍隊)



エチオピアの軍隊が上級將士を除いて全部裸足である

これは有名だ。首都ア

ジスアベバにはタク

シーもあつて、エ

チオピア人の運

轉手もゐるが

その運轉手

達、洋服な

ど着込んで

でスマ

ート

な形

を

裸足の軍隊

——エチオピアで——

してゐるが、皆んな揃つて裸足である。

彼等にその譯を聞くと、

「私達だつて靴を持つてゐるんですが、

皇帝陛下の御命令で運轉手が靴をはくの

を禁じられてゐるのです。つまり戦争の

時に、裸足で山野を馳廻ることが出来な

くなるといけないからです。」と云つてゐ

る。

☆

軍隊には飛行機も十數臺あつて、

エ軍の飛行將校も七八名はゐる。そ

の飛行機が毎日アジスアベバの上空

を飛び廻つて練習してゐる。寫眞は

エ軍の飛行機と飛行將校である。

☆

宗教はカトリックで大僧正が政治上に

も非常な勢力を持つてゐる。

上掲寫眞は原始基督教の儀式を好んで

行つてゐる教會の
牧師である。

• • •

モダンなエチ
オピアの飛行
將校達





去來の梅 一幕

北村余志子

人物 落柿舎去來 (五十一歳)

百姓 棕兵衛

女房 おかや

鳴海屋の伴 清四郎

近江屋抱へ おその

同じく仲居 おとみ

大原女 甲、乙

時代 元祿十四年、早春

場所 洛西 仁和寺附近

第一景

舞臺中央よりやゝ上手に二重屋臺にて、上方風の百姓家。屋臺の下手に出
入口。上手に濡縁附きたる座敷。障子が閉めてある。その前より舞臺の下

手へかけて廣き庭あり、低き生垣をめぐらす。その下手にさゝやかなる枝折戸。庭のよき所に一本の立派なる梅の立木を置く。梅は今を盛りと咲匂つてゐる。背景には雙が丘をうすく見せる。元祿十四年早春の洛西仁和寺附近、鶯の聲にて幕開く。
(うらゝかな春の朝日が、下手よりさしてゐる。百姓家の老爺椋兵衛が、庭にて枯枝を束ねてゐる。やゝ間。上手より大原女二人登場。庭の前を通りながら梅の木を眺める。)

去

女甲 おゝ、えゝ匂ひやな。

女乙 ほんまにえゝ匂ひやな。

來 女甲 にはかに暖うなつたので、あない見事に咲き揃ふたんやろ。

なア、おツさん。(庭にゐる椋兵衛に聲を掛ける。)

の 椋兵衛 (ちらりと大原女を見て、ぶつきら棒に) そやろ。

女乙 今年も定めしたんと實が取れまツしやろ。なア、おツさん。

梅 椋兵衛 (同じ調子にて。) そやろ。

女甲 こゝの梅の木は北野はんの名木かて、かなひまへんなア。

女乙 ほんまに見事や。

女甲 なア、おツさん。

椋兵衛 (同じ調子にて。) なんや。

女甲 なんぞ買ふとくれやすな。

女乙 すぐきなど何うとすえ。

椋兵衛 えゝ。梅の木の褒め賃にすぐき買ふとくれかいな。

女甲 ほほほ。そやおへんけど、何ぞ買ふておくれやすな。

女乙 すぐきなど……

椋兵衛 おいてくれ。うちかて百姓やさかい、すぐきなど腐るほど

あるわい。

女甲 ほほほ、さうかいな。

女乙 きついおツさんや。ほほほほ。

椋兵衛 無駄口たゝかず、早う往なんかい。

女甲 ほゝ、小言を貰ふたかいな。そんなら往にまひようか。

女乙 往にまひよう。おうきにお邪魔はん。

(大原女二人捨臺詞にて花道より揚幕へ還入る。)

椋兵衛 やかましい女子共やな。ははは。(立上つて、腰を打ち乍ら

空を見上げる。) おゝ、今日はえゝ日和や。梅日和や。今も女子

共が云ふてはつたが、うちの梅はほんまに見事やなア。(鶯が鳴

く。) ほう。鶯も嬉しさうな。……(座敷へ向つて。) ぼんはん、

ちやつと障子でも開けなはれ。辛氣臭う部屋にばかりゐやはつた

ら、體に悪うおすわいな。

(障子の内からは返事なし。椋兵衛は梅の木の下へ來り、手頃の

枝を手折る。)

椋兵衛 おゝ、えゝ匂ひや。……なア。ぼんはん。梅の匂ひでも嗅

ぎなはれ。胸がスーッと開きまつさ。なア、清四郎はん……

(座敷の障子が開き、清四郎が立出る。色白き京男。憂鬱さう

な顔をしてゐる。）

清四郎 うるさいな。

椋兵衛 え、うるさい事などおへん。そないにきなきな物思ふてばかりおめでやしたら、終ひには體に障りまつせ。病に取りつかれなはつたら、わて、親旦那はんに申譯なうおすやないか。

清四郎 そやかて、うちの勝手や。

椋兵衛 勝手に済まうかいな。親御はんから頂いた大切な體や。粗末にしやはつたら罰が當りまつせ。（手折つた梅の枝を清四郎の所へ持つて行く）そら、え、包ひでつしやう。

清四郎 （それを受取つて。）物云はぬ花などうち面白うないわ。

椋兵衛 （縁に腰かけ烟草をふかし乍ら。）そないに東のおやまはんが忘れぬのかいな。

清四郎 さうどす。

椋兵衛 はははは。あつさり云ふてはる。もう一と月も逢はさぬさかい……。

清四郎 ほんまに、もう一と月にもなる……。

椋兵衛 先はんは賣りもんやで、もう夙の昔に、ぼんはんの事など忘れくさつたやろ。悪い事は云はん。早う諦めて親御はんを安心させはつたがよろしいえ。

清四郎 阿呆。あのおそのにかぎつて、幾日逢はぬかて心變りなどしやはりまへん。

椋兵衛 それ、それ、そないに思ふさかい、あんたはんは赤子はんや。

清四郎 （無言にて梅の花をむしる。）

椋兵衛 おやま狂ひが嵩じて、親旦那はんからきつうい灸點。こないなむさい所へ押込められはつたを、誰が何時まで思ふてはりまはか。先も商賣やでな、後のお客はんを探さんなりまへんやろ。諦めなはれ。諦めたが身の爲や。

清四郎 （ヤケに梅の花をむしる。）お、辛氣臭さ。（空坊主にした枝を放り出して立上り、座敷の内へ這入つて横になる。）

椋兵衛 そら、わてかて身に覺えのあること、若い者に無理云ふのやおへんがな、東のおやまはんばかりが女子やない。もうえ、加減に思切りなはれ……（立上つて捨てられた梅の枝を拾ひ上げる）お、可哀さうに、あつたら梅も毫無しや。

（椋兵衛は口小言を云ひつゝ元の場へ戻り、その梅の枝も共に又枯枝を束ね始める。この時揚幕より落柿舎の去來がブラリと出て来る。）

去來 （花道にて。）あゝ。よい心持だ。北野へ朝参りとは思ひつきであつたわい。……梅が香や山路獵り入る犬のまね……

（去來は機嫌よき體にて本舞臺へ來り、ふと庭の梅に眼を止める）
去來 ほう。咲いた、咲いた。見事に咲いたなア。（垣根越しに打眺める。）

(棟兵衛は顔を上げて去來を見る。鶯が鳴く。去來はうつとりとしてゐる。)

去來 親父どの。よい梅の木をお持ちだな。

棟兵衛 はい、はい。此處を通るお方はどなたも褒めてくだはります。

去來 さうであらうとも。見れば見る程よい梅だ。わたしもずつと以前からこの梅の木の立派さに心を惹かれてゐたのだが。かうしてしみ／＼見るとまた格別、何となう離れがたい氣持がする。そなたが羨ましいな。

棟兵衛 はははは。これはきつい御執心やな。そないにこの梅の木がお氣に召しましたかいな。

の 去來 うむ。枝振りと云ひ、花と云ひ……。云ひ出し憎さうに。親父どの。近頃ちと御無心だが、この梅の木をわたしに譲つては下さらぬか。

棟兵衛 えゝ、この梅の木を？

去來 うむ。

棟兵衛 (去來の顔を打眺める。)

去來 賣つて頂けないかな。

棟兵衛 へえ。……

去來 お嫌かな？

棟兵衛 へえ、嫌と云ふ程の事も御座りまへんが……。云ひ渡る。)

去來 うむ。そなたとても手離しがたからうな。……だが斷られ、ば猶更に欲しくなつて来る。何うだな。譲つて下さらぬか。

棟兵衛 へえ。そら、お好きなお方に根引きされゝば、かへつて梅も喜ぶやろが……。まアお待ちなはれ。……(立上つて屋臺の出入口の方へ行き。婆はんや、……婆はんや、ちやつと来てくれ。)

(屋臺の奥より女房のおかやが返事をしながら出て来る。)

おかや 呼ばはつたかいな。

棟兵衛 おいのう。あのお方はんがな……。

おかや (去來を見て挨拶する。) ようお來で。……まア、お這入りやす。

去來 (默禮のみにて枝折戸の外に立つ。)

棟兵衛 (女房を枝折戸の所まで連れて来る。) なア、このお方はんが、うちの梅の木を欲しい云ふてはるのやが。お前、何うや。

おかや (驚いて。) ああ梅の木をかいな。

棟兵衛 おいのう。

おかや なんぼで買ひなはる云ふてまんね。

棟兵衛 まだ値は附けぬが、お前は賣る氣かいな。

おかや そら、値さえよければ手離してもえゝやないか。

棟兵衛 そらさうやけど……。

去來 お譲り下さるか。

おかや へえ。お譲り申しますけど、まア、お値段と相談え。

去來 ふむ。如何ほどくらゐなら……。

おかや そやなア、二兩……二兩位なら……。

椋兵衛 二兩……。そや、そや。二兩ならえ、やろ。

去來 (驚きて。) 二兩? それはちと高すぎる。何時ぞや都の商

人が来て、うちの庭の柿を、一貫文で買ひ求められた。それから

思ふと、大層高いと思ふが……。

おかや そら、どないな柿の木か知らへんが、あんたはんも見なは

入通り素姓のえ、木やさかい、その位は貰はんとなア。

椋兵衛 それでお嫌なら、まアそれまでの事で御座ります。

去來 (改めて梅の木を見る。) うむ。わが身にはちと高値なれど

……。うむ。二兩で買はう。求めませう。

の 椋兵衛 二兩出してもお求めなはるか。

おかや (思はせ返りに。) ほんまの所は惜しうおすのんえ。

去來 とんだ驚宿梅だな。……では、今出先で持合せもないから、

明日にでも改めて参ることに致したい。

椋兵衛 はい、はい何時なとお越しやす。

おかや して、あんたはんのお名前は?

去來 落柿舎の去來。御存知もあるまいが、小倉山の片畔に住むし

がない俳諧師でござるよ。はははは。

おかや 俳諧師はんかいな。(去來を胡亂さうに見る。)

去來 では、又かさねて……。

椋兵衛 お待ち申してをります。

おかや 御免やす。

(去來はゆつたりと上手へ去る。)

椋兵衛 梅の木ともお別れかいな。

おかや 二兩に賣れるならえ、やないか。

椋兵衛 あれはお前が嫁に來やはつた時に植え

たんやつたなア。

おかや ほはほ、古い昔の話や。……けどなア

毎年たんと實かなるさかい、もうちつと高う

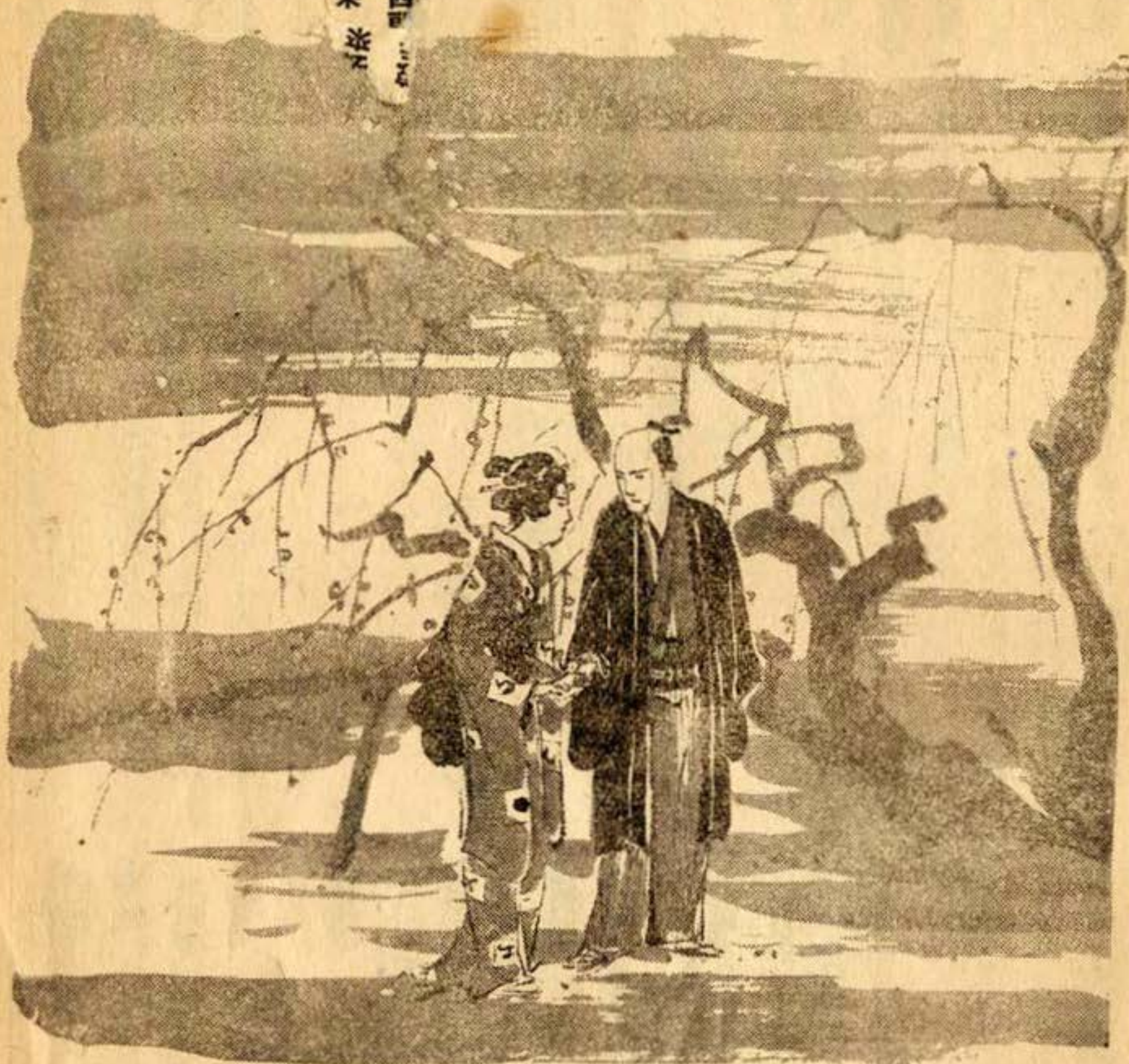
云ふてもよかつたんえ。惜しい事をしたわい

な。(つぶやきながら屋臺の内に這入る。)

(椋兵衛は梅の木の下へ來り、今更のやうに



清四郎
米



懐しく見上げる。

清四郎 (部屋の内にて。) おつさん。お前から別れる事は辛いやろ。それみいな。……うちほもつと辛かつた。物を云ふ花やもの……。

椋兵衛 ……。

(鶯の聲。)

— 暗 轉 —

第二景

それより五日程の後、舞臺は前の場と同じにて、八ツ時頃の陽が暖さうに庭に當つてゐる。

(椋兵衛が人待ち顔にて門の内に立つてゐるやゝ間。舞臺の上手から去來が一飄たづさへて出て来る。)

椋兵衛 (去來を見ると門の外へ出て迎へる。)

おゝ、おいでやす。あんたはん、今日あれを持つてお往にやすのんか。

去來 いや。

渡兵衛 そんなら、今日もあの木の下でお遊びなはるのんか。

去來 お邪魔かな。

渡兵衛 いや、いや。そやツたらな、これからわてちやツと留守にするさかい、あの座敷にゐるぼんはんをな、外へ出さぬやうに頼みまッせ。生憎、婆はんも出てはりますのんで……。お頼み申しまッさ。

まあ おゝ、よいとも。

去來 おうきに。……

(渡兵衛はそのまゝ上手の方へ這入る、去來は門の内へ這入る。)

道具半廻しにて庭の内になる。正面の生垣だけ取り去る。)

(去來は有合せの筵を梅の木の下へ敷き、其處へ坐り瓢の酒など飲みながら、何事か考へつゝ矢立を取出して、懷紙に筆を走らせる。やゝ間。座敷の障子が開きて清四郎が現はれる。)

清四郎 (去來を見て。) 先生、おいでやす。

去來 おゝ、清四郎殿か。……今日もよい日和だな。

清四郎 毎日えゝ天氣が續きまんな。

去來 (筆を休めずに。) 御退屈であらう。

清四郎 ほんまに……。あんたはんが、羨ましくうてかなひまへんのだや。

去來 誰でも他人の身は羨ましく見えるものでな。はははは。毎日

なにをしてお暮しかな。

清四郎 なんにもする事などおへんわいな。

去來 ほう、それは勿體ないな。

清四郎 早う家へ歸りたいのやがな、親父のシブチンめが怒りくさッて、あてを家へ入れぬさかい……。

去來 お宅は四條通りの鳴海屋さんとか云ひましたな。

清四郎 さうです。親父め、置く所に事かいて、あてをこないなむ

さい乳母が里へなど押込めくさる。ほんまにきつうおすえ。

去來 まあ、若い時にはまゝある事だが、きつと身を謹んで早く親

御の許へ歸られるやうにするのだな。

清四郎 へえ。……そやけど、あては何うも思ひ切れまへんね。

去來 ははは。思ひ切れぬのではなうて、思ひ切らぬのであらう。

清四郎 同じ事やおへんか。

去來 さうかな。……そなたもこちらへ來て附合はないか。

清四郎 おうきに。……

(清四郎は二重より降り來つて去來の傍へ坐る。去來は杯を渡してまた筆を持ち、書き始める。)

清四郎 やはり俳句ですか。

去來 (書き乍ら。) 俳句はお好きかな。

清四郎 教へてくだはりまつか。

去來 教へる程の身でもないが……。

清四郎 儲かりまつか。

去來 (筆を休めて。) はははは。……渡世の爲に俳句を作る者もあるには有るが……。はははは。

清四郎 そんなら、あんたはんは何の爲に作りなはるのや。

去來 さて、わが身のためにとでも云はうかな。

清四郎 面白うおすかいな。

去來 はははは……。

清四郎 なんかえ、句を聞かしておくれやす。

去來 左様さな。……うき我をさびしがらせよ閑古鳥……。うき我

をさびしがらせよ閑古鳥……。これは翁のお作だ。お解りかな。

清四郎 へえ。……もつと解りさうなのを聞かしておくれやす。

去來 ……うき友にかまれて猫の空ながめ。……うき友にかまれて

猫の空ながめ。

清四郎 解る。解る。戀猫がかまれたんやな。

去來 遊ぶとも行くとも知らぬ乙鳥哉。……遊ぶとも行くとも知ら

ぬ乙鳥哉。

清四郎 こん度はつばめの句かいな。

去來 (馬鹿々々しくなつて、眼を閉ぢじつと考へてゐる。)

(この時揚幕より、先斗町近江屋の抱へのおそのが、小走りで出て来る、そつと垣の内をのぞく。)

おその お、清さま……。

(清四郎は驚いておそのを見る。)

清四郎 お、お前は……。 (と云ひ乍ら去來を見る。)

(去來は眼を閉ぢたまゝである。清四郎はそつと立つて行かうとする。)

去來 (眼を閉ぢたまゝにて。) 何處へ行く?

清四郎 あ、はい。……あの、鶯が飛んで來やりましたんや。

去來 鶯か。……(そのまゝ黙す。)

(おそのは外にて清四郎をまねく。清四郎はたまりかねてそつと外へ走り出る。)

おその (清四郎に取纏つて。) 清さま。逢ひたかつた……。 (泣く。)

清四郎 あても、あても……。 (おそのを抱く。) よう來てくれはつ

たなア。

おその 車折はんへお参りする云ふて、仲居のおとみはんと、一緒に家を出ましたのやけど、途中でまいて來ましたわいな。

清四郎 そら、え、事しやはつた。もう離れぬぞえ。

おその あいなア。

清四郎 (去來に氣兼ねしながら。) さア、早う逃げよう。

おその 何處へ。

清四郎 何處かて構はん。早うこゝを逃げ出せばよいのや。

おその あい。

(清四郎はおそのの手を取つて下手の奥へ遁入る。)

去來 (眼を開ける。) 鶯の音にさそはれし……。 (梅の梢を見上げる。)

下手から棕兵衛の女房おかや登場。

おかや (疲れたる體にて。) おゝ、しんど。(庭へ這入る。) おゝ、旦那はん、おいでやしたか。

去來 おゝ。……お留守のやうだつたが、どちらまで……。

おかや 今日はヤツとの思ひでな、四條のお店はんまで往んで來ましたんえ。

去來 それはそれは遠い所まで。……お疲れであらう。

おかや へえ。もうしんどうて、しんどうて……。けどな往んでよう御座りました。あのぼんはんの親旦那はんも、おうきに氣を折らはつてな、直きに免して連れ戻す云ふてはります。あゝ、これでわての御用も済みましたわいな。

去來 ほう。さうか。

(おかやは座敷の方へ行き内をのぞく。)

おかや おや、何處ぞへ往なはりましたんやろか。あんたはん知りまへんか。

去來 さア、わたしは知らぬ。

おかや そやかて、あんたはん、其處におゐでやしたんやろ。

去來 おゝ、居たにはゐたが、つい梅の香に酔はされてうとくしゐた。

おかや ……そんなら家の中にでも……

(おかやは庭より座敷へ上り奥へ這入る。去來は杯を傾けてゐる。やゝ間。舞臺上手奥より、棕兵衛が清四郎とおそのの手に取つて、無理に引摺つて庭へ這入つて來る。去來は驚いて黙つて見てゐる。)

棕兵衛 えゝ、大それた事しやはる……。

おその 御免しなはれ、御免しなはれ。

清四郎 頼む。頼む。見逃してくれ。

棕兵衛 見逃してたまるかいた。……えゝ、女、其處へ坐らんかい。

(おそのを邪慳に地上へ引据ゑる。)

おその あゝ。(地上へ泣き倒れる。)

棕兵衛 ぼんはんも座敷へ上りなはれ。えゝ上りなはらんかい。

(清四郎は座敷へ上り、意氣地なく泣きくづれる、この騒ぎに驚いて座敷の奥よりおかやが走り出る。)

おかや あれまア、何うしたんえ。

棕兵衛 あゝお前戻つてゐたんか。……何うもかうも、ちやツと留守にすればもうこの有様や。

おかや あれ、女子が連れ出しに來やはツたんかいな。よう云はんな。

棕兵衛 わてが見附けなんたら、ほんまに、どないになる事やつたら。

おかや ほんまになア。(清四郎に。) ぼんはん、親旦那はんがお免しくだはる云ふ矢先に、うかくした事しやはるなえ。

惣兵衛 えゝ? そんなら親旦那はんは氣を折らはつたんかいな。

おかや あいなア。そやさかい喜んで戻つてみれば又これや。

惣兵衛 あゝ、ほんまにえゝ所やつた。あのまゝで見いな、わて鐵腹でも切らんことには濟まんやつたら。

おかや ほんまえ。

惣兵衛 (去來の方を顎で指して。) あのお人に頼んで出掛けたんや

がな。

來 おかや なんの居眠りしてゐやはつたんやさうな。

惣兵衛 頼み甲斐もないお人やな。(去來に皮肉めかして。) 旦那は

の ん、何うもおうきに御苦勞はんで御座りました。

去來 とんだ事であつたな。

惣兵衛 へえ。若いものは無茶でほんまにかなひまへん。ははは

は……。

(この時揚幕の方より、近江屋の仲居おとみが急ぎ足にて出て來り門に立つ。)

おとみ おゝ、しんど……(門の内へ。) あのもうし……。御免やす。

惣兵衛 はい、はい、何誰はんどす。(門まで行く。)

おとみ あの、つかん事をお尋ね申しまするが、おうちには四條通り

鳴海屋の清四郎はんがおゐでなはるお宅で御座りますかいな。

惣兵衛 さうどす。

おとみ そんなら、もしや此處へたつた今東から女子が尋ねて見えまへなんだか。

惣兵衛 えゝ、來やはりましたわい。

おとみ おゝ、それで安堵しましたわいな。ちやつと逢はせてくだはりませ。

惣兵衛 逢はせる所かい。早う連れて往んでくれ。あそこに泣いてくさる。

おとみ あれ、きつい事わいな。(おそのゝ側へ駆け寄る。) おそのはん……。

おその (おとみを見て驚き。) あゝ、おとみはんか。(慌てゝ上手へ逃げ出す。)

おとみ (その袖を掴む。) これ、お待ちいな。

おその あれ、ゆるして……。

(清四郎も二重より降りやうとするが、おかやが捉へて離さぬ。)

清四郎 おその……。

おその 清さま……あしや死にたい……。

清四郎 おゝ……。

おとみ なに云やはる。さア、わてはなんにも云はぬさかい、早う往にまひよう。往にまひよう。

清四郎 おとみはん、おそのはやらぬ——。

おとみ ほほほ。あんたはんのものやおへんわいな。

おその いえ、いえ、あしや清さまのもの……。

清四郎 そや、そや、わてのもんや。往なすもんか。(おかやに。)

え、離してくれ。

おかや 離してなるもんかえ。(おとみに。) 早う引摺つてなと往なぬかいな。

おとみ 往ぬなと云ふたかて、往にますわいな。(おそのの手を無理に引く。)

おその あゝ……(泣く。)

来 惣兵衛 (側へ寄り。) えゝ、とつと歩まんかい。

おとみ おそのはん、帯で掃き出されぬ中に、なア、往にまひよう往にまひよう。

おその (引かれながら。) 清さま……。

梅 清四郎 おその、おその……。

(おとみはおそのをグイ／＼引摺るやうに外へ出る。おそのは泣き乍ら引かれて揚幕へ這入る。清四郎はがっかりして泣く。おかやはそれを慰める。)

惣兵衛 あゝ、嵐でも去つたやうな……。

おかや ほんまになア。

(去來もこの時初めてほつとしたる體にて立上る。)

去來 どちら、わたしもお暇を致さう。

惣兵衛 (ハツとして。) これは、これはえらい騒々しうて御迷惑で

御座りましたやろ。

去來 いや、なに……はははは。

惣兵衛 えらい濟まんこつて御座ります。

去來 では、どなたも御免……。 (行きかける。)

惣兵衛 あゝ、もうし。あんたはん、何時あの木をお運びなはるお積りかいな。

去來 あゝ、あれか。あれはそのままにして置いて貰ひたい。

惣兵衛 なんや。あのまゝに? 何うしなはる氣かいな。

去來 いや、何うもしない。何時までもそのまゝでいゝのだよ。

惣兵衛 へえ。そやかて、あんたはん、欲しい思やはつたんで、二兩の金出しはつたんやろ。持つて往んでくだはらんか。

去來 ははは。我家の庭は狭いので、持ち歸つても置く所がない。

まア、今まで通りこゝへ置いて貰はうよ。

惣兵衛 へえ、置く所も無うて貰ひなはつたんか。可笑しなお人やなア。(考へて。) そんなら實がなつたら持つてお往にやすか。

去來 いや、實もいらぬよ。

惣兵衛 ほゝう。けつたいなお人や……。わては實かたんと取れるさかい、あないに高う賣りましたんえ。花見するだけやつたらた

に見に來やはつたらえゝやないか……。この間のお金は返しまつ

さ。

去來 はははは。…… (猶ゆきかける。)

惣兵衛 (その袖を捉へ、女房を呼ぶ。) おい、おい、この間の二兩を持つてきや。

おかや え、この間のお金を何うしやはる。

惣兵衛 このお人にお返しするのんや。

おかや え、買ふのを止みなはつたんか。 (慌て、二重より降りて来る。)

(清四郎も思はずその方を見る。)

惣兵衛 え、何でもえ、から早う持つて来んかい。

去來 いや、そのまゝ、そのまゝ。 (捉れた袖を軽く拂ふ。)

惣兵衛 え、待ちなはれ。わては花見など賣らんわい。

去來 いや、心配しなさるな。氣が向いたら又參らう。 (飄然として外へ出る。)

惣兵衛 (憤然と。) わてにはよう解らん。花があのお人のものやつたら、實もあのお人のものやないか。

おかや そやかて、いらぬ云ふてるさかい、貰ふといたらえ、やないか。

惣兵衛 わては實を賣つたんや。……えゝわい。今年からはなんぼ實がなつたかて、とつとくからえゝわい。 (おかやに。) 落實一つ拾ふてもあかんぜ。 (梅の梢を睨める。)

おかや おゝ勿體な。世の中には贅澤なお人もあるもんやな。

(清四郎はこの時ふいに立上つて、庭へ下り門の所まで行く。)

清四郎 (去來の後から。) 先生……。

去來 (ふつと振返へり、和やかに笑ふ。)……。 (去來はそのまゝ花道より揚幕へ這入る。清四郎は黙つてそれを見送つてゐる。仁和寺より入相の鐘の音が靜に聞えて来る。)

—— 幕 ——

主意に従ふ

森蘭丸が或時蜜柑を多數臺に積んで、力自慢をしたところが信長之を見て「お前の力ではあぶない。倒れるな」と云ふ間にたう／＼倒れて蜜柑を座中に散らかしてしまつた。後に或る人が蘭丸に向ひ「御前であの失態は笑止の至りである。」と嘲笑したとき、蘭丸曰く「もし自分がよく臺をもちつゞけたならば信長公の御目きゝが違つてくるから倒れたまゝである。それに戦場と異なり座敷で倒れたのであるから武道の瑕にはならな

い」と平然としてゐたといふ。

勇將の氣魄

策謀利あらず遂に六條河原で梟首と決まつた小西行長等が、愈々首の座に著いた時、檢使行長に向ひ「何事によらず云ひ遣すことがあれば言はれたい。」と申渡したところ、行長キツと檢使等の顔を見つめ「日本のみならず唐土にまでも、かくれなき行長ほどの者が、たとへ言ひおくことが萬億あつたとしても、今更白狀する必要がどこにある。愚かなる顔かな」と首をさしのべて討たれた。

ち ☆ い ☆ ペ ☆ の ☆ も ☆ ど ☆ こ

童 話 — 勢至丸さま

安藤徇之介

勢至丸さまは、

ちさい、ちさいお坊さま、

まるいおつむに、

後光がひかつた。

勢至丸さまは、

おやさしいお坊さま、

弓矢などほうつて、

仇うちなどやめて。

勢至丸さまが、

えらいお坊さまになつた、

法然さまになつた、

むかし、むかしのお話よ。

かたきをうつな！

— 勢至丸さまのはなし —

法然上人さまがお生れになつたのは長承二年四月七日ですから、今から八百年ほどまへのこととあります。

おさない時のお名前を勢至丸とおつしやいました。その時分から學問もたいへんおできになりましたが、弓矢をもてあそぶことも、人なみすぐれてお上手でした。

九歳の時に、源内武者定明といふものが、おほぜいの家來をつれて、勢至丸さまの御父上、漆時國さまのやしきに夜うちをかけました。ふいのこととで、なんの用意もしなかつたため、勇ましく戦つた時國さまも、つひに敵のために多くの傷をうけてしまひました。

その時、わずか九歳の勢至丸さまは、ものかげから小さな弓矢をもつて、敵定明のみけんをねらつて射かけたので、それがために定明は時國さまをうちたすことができずに逃げさりました。はげしい戦ひのなかで、これだけの働きをするといふのは、よほど勇氣のある子であつたにちがひありません。

父時國さまは傷をうけて、自分はとても助らないとさつた時、勢至丸さまをおよびになつてまをしました。

『かならず仇をうつてはならぬ。もしこの仇をうたうとしたならば、それはきりのないことである。命のあるものはたれでも死ぬことを悲しむものだ。自分もいま命をおしんでゐる。他人も命をおしむに違ひない。自分はいまこの傷のために苦んでゐる。他の人も苦しむにちがひない。自分の心持で他の人の思ひをはかり知ることができる。だから、うらみなどを持たずに、他人も自分と同じやうに救はうといふ氣もちにならなくてはならぬ。』とおさとしになつて、おかくれになりました。

その時の勢至丸さまのおなげきは、ことばでいひつくすことはできません。けれど、またそれだけに、お父上のこの立派な御ゆいごんをかたくお守りになつて、お坊さんになられて一心ふらんにお勉強なさいました。のちに、どんな人でもお救ひにすぐることの出来る淨土宗をおひらきになり、いまでも何百萬何千萬と云ふ人にうやまひ、したはれておいでになります。

(おはり)



英 國

童 話



獨逸の南に、グ
リンキーゼルと呼
ぶ小さな町があり
ました。何んなこ
とが起つても直ぐ
町全體に知れ涉つ

て仕舞ふと云ふ位ひ小さな町なので
す。朝の中にお寺や町の役所から御觸
れが出れば、晝食の時にはもう町中が
その噂で持ち切りになると云ふ仕末で
す。午後になると町中の女房連はお互
ひに他の家を訪ね合つて、町中の噂話
でくたびれるまで饒ります。だから、
どんなつまらないことでも、町の人の
知らないものはないと云ふ有様だつた
のです。

ところが、或る日この町へ、何處か
ら來たのか、何んのために來たのか、
またどうして暮してゐるのか、全く解
らない不思議な人物が現はれたので
す。それで、町のことは何んでも知つ
てゐる筈の人々は、このことだけで大
變不愉快になりました。
町長さんは勿論その男の旅行券も調
べたのですが、ちゃんとベルリン（獨

逸の首府です）からグリンキーゼルへ
行くと云ふことが書いてあつたさうで
す。然し、どうも疑はしいところがあ
る、と町長さんは云ふのです。この町
で一番尊敬されてゐる町長さんまでが
さう云ふのですから、他の人達がこの
不思議な人物を疑ひの眼で見るやうに
なつたのも當然です。

その不思議な人物は家を一軒借り切
つて、鍋や釜や家財道具を馬車一つば
いに持ち込んで、たつた一人でその家
に暮し始めたのです。勿論食事も自分
で作るので、この家にはその外に町つ
子の老人がたつた一人、居るきりでし
た。尤もこの老人も、彼にパン、野菜
肉類などを買つて來てやるだけで、品
物を彼に渡して仕舞ふと、もう用事は
終つてしまふのです。

この不思議な人物は、外の人達の様
に、午後になつて球轉しをやり遊び

士紳

じうか 林小
畫郎三貫田吉

場に來たり、夜になつて酒場で皆んなと世間話をするといふやうなことは、全くないので、市長やお坊さんやお醫者さんなどがお馳走やお茶に招いても、斷つてしまつて一度も行きません。そんなわけで、彼を氣狂ひだと云ふものもあれば、魔法使に違ひないと噂するものもありました。

◇
ところが、或る日この町へいろいろ見慣れない動物を連れたい群の旅藝人がやつて來ました。その中にはお辭儀をすることの出来る駱駝や、踊りをおどる熊や、人間の着物を着て、色々と稽滑な藝當をやる猿や、犬がおりまし

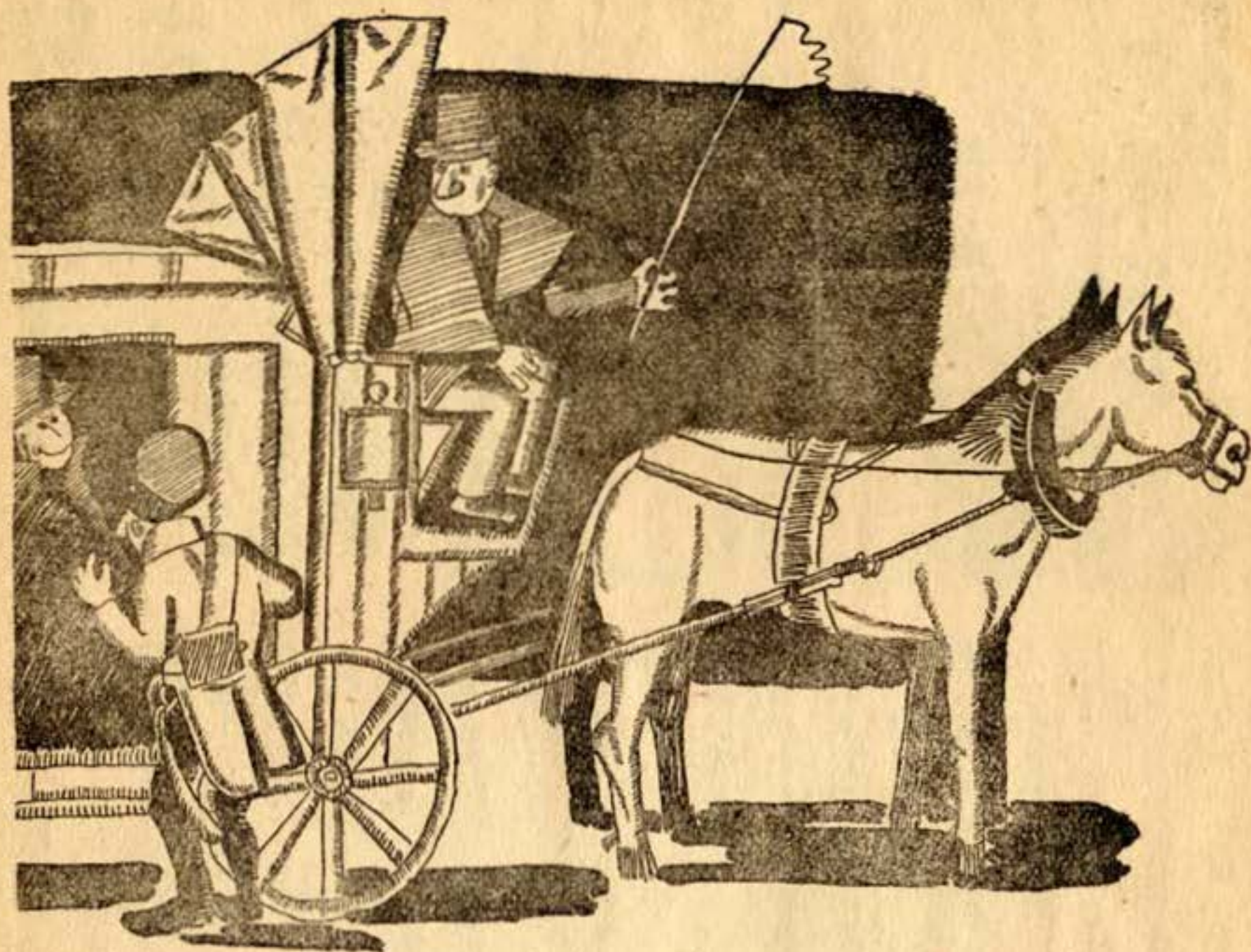
た。この旅藝人は街の真ん中の廣場にやつて來て、小さな笛や大鼓でまづい音楽をやつて踊つたり、歌つたりしてゐました。ところが、この藝人たちの中で一番人目を引いたのは、一匹のつかい狸々で、大きさはおよそ人間の丈程もあり、二本脚で立つて歩いて、色々と人間並の藝當をやること出来るのです。

この犬と猿の藝當はあの不思議な人間の家の前へもやつて來ました。笛と大鼓が鳴り響くと、その不思議な人間は窓のところへ現れて、始めからあまり氣もなさうに見ておりました。ところが、例の狸々が藝當を始めると、急に愉快さうに窓から乗り出して、皆んながあきれる程、大聲で笑ひ出ししました。その上にです。そのおどけ者に一番大きい銀貨をやつたものです。町中の人にその噂がひろがつたのは云ふ

までもありません。

次の朝、その旅藝人はその町を出て行きました。駱駝は大きな籠を幾つも背中にしよつて、その中には犬や猿がおとなしくすわり込んでゐるのです。けれど、動物使ひの例の大きな狸々は駱駝の跡から歩いて行きました。ところが、その旅藝人達が町の門を出てから間もなく、あの不思議な人間は急に馬車屋にかけつけて、特別仕立の馬車を一臺出してもらひ、それに乗込んで、たつた今、藝人達が歩いて行つたばかりの道を、飛ぶ様に走つて行きました。町の人達は、彼が何處へ行つたかさつぱり解らないので、またそれを氣にし出しました。

◇
不思議な人間が再び町の入口に歸つて來た時はもうとつぷり日が暮れてゐました。馬車の中にはも一人の人間が



座つてゐましたが、その人は帽子をぐつと眞深にかぶつて、耳と口は布で縛つてゐました。町の入口にゐる門番は、自分の義務ですから、そのも一人の男に、旅行券を見せて呉れと云ひました。ところ

いたこともないやうな言葉でぶつ／＼言つてゐるのです。

すると、あの不思議な人物は門衛の手に銀貨を握らせながら、優しく言ふのです。

『これは私の甥ですが、ドイツ語が一寸も解らないのでね』

『あゝ、貴方の甥御さんですか、それなら別に旅行券をお見せにならなくてもよろしい。確かに貴方と御一緒にお暮しになるのでしような？』

と門衛が言ひました。

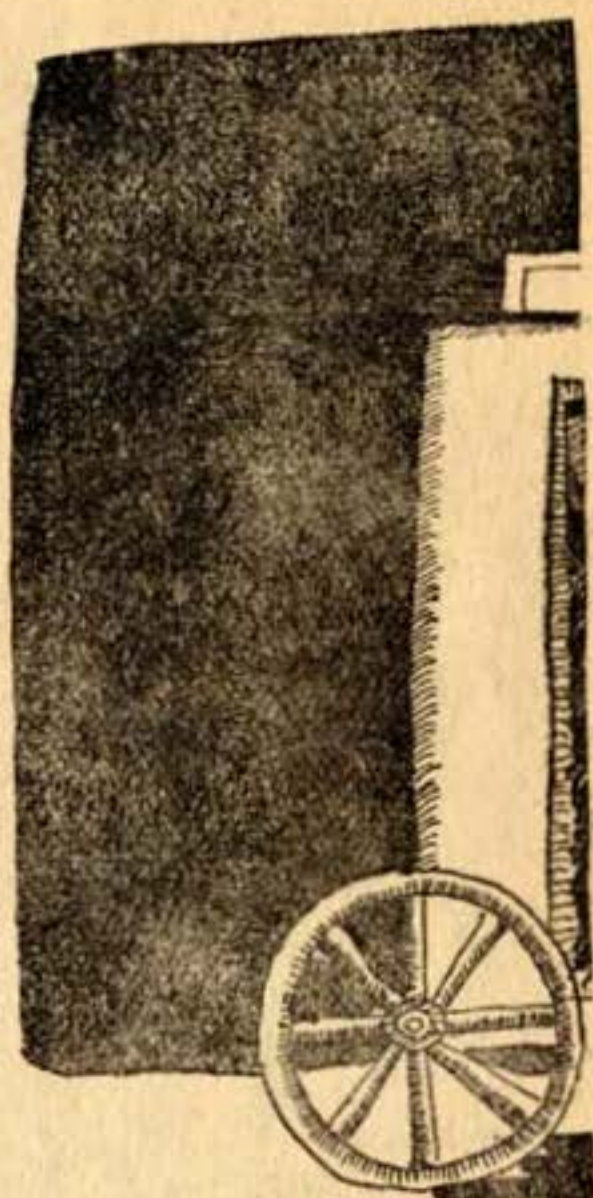
『そうですとも、長いこと滞在するつもりです。』

門衛はそれ以上尋ねませんでした。

不思議な人間とその甥は町に入つてしまひました。

あとになつて町長さんを始め町中の者は、この門衛のやり方をよく思ひま

せんでした。少くとも、甥といふ人の



口から一言や二言は聞きとれたかも知れないのに……そうすれば、彼とその叔父さんとが、何處の土地のものか解つたであらうに……。門衛が云ふには、あの言葉はフランス語でも、イタリア語でもない、英語のやうな氣がした。なんでも『ゴツダム』（こん畜生！）と云つたやうだつた、とかう云ふのです。で、門番の責任は逃れました。そしてその若者は英國人だと云ふことになりました。町中の人は、それからはその英國人のことばかり噂してゐるのです。

現はしませんでした。けれども、もつと他のことで、町中の評判になつたのです。——と云ふのは、今まで静かだつた不思議な人物の家から、恐ろしい叫び聲が聞えて來るのです。で家の前は一つばいの人ばかりで、窓から中を覗き込んでゐるのです。赤い上着と青いズボンを着た例の若い英國人が、頭をくしやく／＼にして、恐ろしい顔付きで驚くばかりの早さで、部屋をあちこちと走り廻るのが窓から見へるのです。年齢をとつた方の不思議な人物は、赤い寢巻を着て、鞭を持つてそのあとを

◆
ところが、その若い英國人も叔父さんと同じやうに球轉しにも、酒場にも姿を

追ふのですが、仲々捕りません。或る日、その若者を丁度窓際で捕へた處を町の人達に見られて仕舞つたのです。その時人々は痛々しい叫び聲と鞭の鳴る音を聞いたと云ふのです。そして、この若者に對する無慈悲なやり方に先づ第一に憤慨したのは町の女の人達です。で、到頭そのことを町長さんに訴へました。そこで、町長さんは早速その不思議な人物に手紙をやつて、彼の行爲を非難し、もし今後ともそのやうな亂暴を止めないなら、あの若者は町長自身で保護しなければならぬ、と云ふてやりました。さあ大變です。これからその若者をいぢめるやうなことがあつたら、すぐ町長さんが連れて行つてしまうことになるのです。不思議な人物はどうしたらよからうかと考へました。（つゞく）
次號はいよく面白くなります。

心の明鏡

一枚起請文講義(六)

中村 辨 康

ねばりある信仰

(ル) 最も強い証言

法然上人の信仰は極めて直截簡明で、然かも非常に力強いねばりを持つて居る。

「念佛で救はれるのだ」

「若し此外に深い秘義でも隠して居るなら、自分が一生の精魂を盡くして求め索り、そして今ま死なうとして居る此時まで血肉をけづつて行つて來た念佛も無駄となり彌陀釋迦二尊の御慈悲にも洩れ、命と頼む本願にも捨てられて、永遠の苦みに墮ちてもよい。」と

この一枚起請文で、さう誓言して居られる。即ち起請文と云はれるのも此の誓言があるからで、其内面的な意味は非常に大きな確信と力強さを示すものである。

信仰の力強さが何の位強いものかと云ふことは、通常の場合言葉で表現する事は困難である。謂ゆる「冷暖自知」のもので、自分自身では譬へば「若し死に直面しても決して恐怖もせず慚慚として微笑み乍ら逝き得るであらう」と確信して居るとしても

完全な證言



「しばられて居ること」

そんなことを口外は出来ない。聽く人には「何かに強がりやを云つて居るのだ」と却て馬鹿にされて仕舞ふに違ひないから、云つたところで始まらないし、且つ吹聴する程の事でもないが、自分の心境としてはさうした確信に満足し得られる。

また假りに言葉で現はして見た處で、言葉位不完全なものはないから、自分の複雑した信仰内容の全部を語られる譯のものでもない。

だから此一枚起請文にあるやうな言葉以外には、到底強く云ひ現はし得ることは出来ないと思ふ。

「自分は自分の一切を如來に委せ切つて居り、そして如來の本願なしには生る瀬もない程に頼り切つて居るのである。此度こそは如來の本願力に救はれて、三界の繫縛を脱することが出来ると云ふ此千載一遇の好因縁を棒に振つても差支へない」との誓言は、「決して間違ひは無い」と云ふ確信があればこそであると共に、此言葉以外には確信の全貌を表現しやうもないのである。

例へば「私は元と貧困なものであつたが、シカジカの事で財産を作つたのである。之は誰がやつても必ず達成せられる事で此以外に方法はない。若しそれが嘘であつたら、私の全財産は皆な捨て、仕舞つて、以前よりもつとひどい貧乏人になつてもよい」と誓言するやうなもので、自分の求めた根本を放擲して差支へないと云ふのだから、是れ程強い云ひ方は外にない筈である。

本願の分類

宇宙精神の具體化

(ヲ) 本願に洩るゝ事なし

阿彌陀佛の本願は宇宙精神を代表したものである。四拾八と云ふ數で現はされて居るが、一般的には之を三種に分類して居る。

一、阿彌陀佛自らを完成する爲の誓ひ

二、一切と共に住むべき世界を完成する爲の誓ひ

三、全人類を幸福ならしむる爲の誓ひ

である。然し前の二は第三の爲にのみ必要するものであるから、結局は「一切を幸福ならしむる爲に」四十八ヶ條の誓願もある譯だとすれば、數は結局内容の上の量の問題であつて、價值の上には大した關係はない。

本願は畢竟宇宙精神の具體化である。

一切の生物を見よ。一つも例外なしに「よりよからん」ことを望んで居るのである。

こんな大きい不思議な事實が外にあるであらうか。

然かも宇宙は廣大なる設備を以て、一切を「よりよからしめん」として居るのである。

天災地變のあるのも、社會的害惡のあるのも、宗教的には逆縁の恩寵である。少くともさう見るのが幸福である。

復雜な相關々係を認むる限り、一切の罪惡も色々な災害も「よりよき」を望む者に取つて

研究の基礎ともなり、改善の機縁ともなる。

少くとも一切のものが「よりよからん」ことを念願して居るのは事實であり、太陽

法藏は其代表者

も空氣も食物も其爲の利用に甘んじて居ることも事實である。

例外なしに凡てが其向上的傾向にさせられて居るとすれば、それを綜合する時、大宇宙は全體その傾向に満たされて居るとも見得るのである。

世の中に偶然と云ふことは無い。

假令、時々偶然の如く見える事があつても、それは一切との相關關係を認むる限り其主要原因なり、又は助縁關係なりがハッキリ分らない迄のものに過ぎない。

此の大宇宙に満つる向上的意志力と云ふか、さうした傾向動力が、一切に働いて居ればこそ、一切の生物が悉く向上的な傾向にさせられて居るのではないかと思はれる。

之がたまたま法藏比丘と云ふ一求道者の稀世の願ひに代表せられて四十八の誓ひとなつたのが謂ゆる本願なのである。

つまり阿彌陀佛の本願は其儘私達の均しく抱く希望であると共に、大宇宙の動力傾向其ものであるのである。

だから、私達が本心から自分の「よりよき」ことを望むなら、それは直に如來の本願に適應して居ることになる。

随て一人も残らず本願に洩れる筈はないのである。
かく意識する時、私達の心に何うしても、阿彌陀佛を念ふ感情が起るべきである。

自惚れの淨化

尠くともかく氣付いた時、私達は本願の中に包まれて居るものであり、且つ阿彌陀佛の子としての意識に立つてもよいものである。

(ワ) 謙虚な氣持

世の中で何が一番氣障であるかと云へば、自惚れと云ふ事である。

自惚れない人はないと云ふから、誰れでもまぬかれぬ本能的なものかも知れぬが、誰でも持つて居るもの丈に、他人の自惚れに對しては同情が持てないのであらう。

だから處世法としても自惚れは寧ろ大きな損失である。人の嫌ふのを敢へてするのであるから、出る杭は打たれるし、第一人間が輕薄に見える。何をしたつて五十年か七十年の一生である。人から好かれぬ自惚れを敢へてしなくてもよささうなものであるが、持つたが性分で何うもさう行かぬのが私達である。

それも「我」が強いからである。「我愛」とか、「我慢」とか云ふ一般的な「我」の觀念でさへ、信仰的には邪魔で、本當に謙虚にならなくては徹底的な篤信者とはなれないのだから、況して自己主張の強い間は本當の信仰には入れない。

法然上人は「智慧第一の法然房」とか、「廣深の法然房」とか、世間からもてはやされたが、ちつとも自惚れと云ふものがなかつた。自惚れの氣持がスツカリ信仰と置換へられて、謙虚になつて仕舞はれたのである。「愚痴の法然房」「童子の如き法然房」として如來の前に額づき得たからこそ信仰深い人となられたのであり、また其當時に

大愚空阿彌陀佛

於ける有らゆる階級の人々に好かれた譯でもある。

法性寺の空阿と云ふのは全くの愚か者で法然上人の教へを受けてからは、念佛の外は何もやらず、乞食同様に住所も定めず、御湯に入る時と便所へ行く時との外は衣もぬがず、聲のよい同行四十八人を頼んで、あちこちの寺々に一日乃至一週間の念佛をして歩き、非常な感化力を以て澤山な信者を作つた人であつた。

常々「嗚呼南無極樂世界」と云つては涙を流して居たと云ふのだから、凡そ性格も察せられるが、念佛の終り毎に屹度

「娑婆に念佛つとむれば、淨土に蓮ぞ生ずなる、一生常に退せねば、この花かへりてむかふなり。一世の勤修は須叟の程、衆事をなげすて願ふべし。願はゞ必ず生れな。ゆめゆめ怠る事なかれ。光明遍照十方世界、念佛衆生攝取不捨」

と唱へるのが、殊に有難かつたと云ふ事である。

それで法然上人は

「空阿は愚痴の人だが、念佛の大先達として化益するところが随分廣い。俺がもし此次ぎ人間として生れるならば、空阿のやうな大愚痴の身を受けて念佛にはげみたい

と思ふ」

と述懐されたと云ふ位で、全くの無我無欲なそして文字通りな謙虚な人であつたが、かゝる態度こそ典型的な信仰人である。

佛の前には平等

誠に如來の御前には一文不知の人であるべきである。

謙虚な氣持こそ信仰人の持つべき氣持である。

たとへ佛教の凡てを勉強しても、概念とか知識とかの問題であつて、實踐の上には素直な謙虚な氣持で、念佛の一行に精進すべきである。如來の御前にふんぞりかへつた思ひ上りの心では、全然信仰人の氣持ではない。

いくら知識が深くても佛の前には無知に均しい。

信仰の上には一文不知のものと區別のあるべき筈はない。

かの阿波介の念佛と法然上人の念佛とが、優劣のあるべき筈がないと云はれたと云ふ有名な話を考へても明瞭なことである。

然るに多くの人の中には、此一枚起請文の「尼入道の無知の輩の如く愚鈍な者になれ」と云ふのは、馬鹿氣た言葉であつて、馬鹿にならねばいけないと云ふなら、自分達は御免蒙ると考へて居る者もあるやうであるが、それは信仰を知らぬからで、愚痴に還ると云ふことは謙虚な氣持で、思ひ上りをせず、赤子のやうに如來に南無する態度を云つたものに外ならない。

尼入道と云ふこと

尼入道と云ふことは「女の坊さん」と云ふ事で、あの時代には、一種の流行の如く佛教に純粹に歸入もしないのに、頭を丸める者が多かつたのである。だから「入道」姿即ち坊さん姿の人はウチャウチャする程居たので、三好清行は

兩手の印

「私かに自ら髪を落し猥りに法服を着る者積年漸く多く天下の三分の二は皆な是れ禿首なり」

と云つて形は沙門に似て居るが甚だしいのになると心は奸盜の如きものもあると慨歎して居るが、別に佛教を學ぶのでもなくまた信ずるのでもなく唯だ入道姿の文盲人が多かつたのである。

其上婦人は文字を知らず、習ふのは假名丈であつたから、漢字のことを男文字とさへ云つて居た。随つて「尼入道」は其當時に於ける文盲人の代表者であつたから、分り易い例として引いた丈のもので他意ある譯ではない。

要は物識ぶらずに而て理屈にこだはらずに、素直な氣持で念佛が出来る事が大切であるといふ信仰實踐法の精髓を示されたものに過ぎない。

(力) 至極の所存

指紋位確かな證據はない。

法然上人は兩手でシツカリと證印を押して、「自分の信仰上の所存は之で盡きて居る。之が念佛信仰の至極であつて、若し自分の死後に色々な説を立てるものがあつても之で訂正する様に」と、後の證據に十本の指紋を押されたのである。

非常な親切な心からである。非常な親切がなくては念佛信仰の精髓を之丈の短い言葉の中に云ひ盡すことは出来ない。また充分に信仰に徹底して居られなくては、是れ

中心ちゅうしんとなるべき明鏡めいきやう

法然上人はふねんしやうにんへの信賴しんらい

程ほどのものは書かけない筈はずである。

凡およそ、人生じんせいに處しよして行くには、何か中心ちゅうしんとなるべきものが必要ひつたうである。若もし之これがなければ、恰さやう度浮草うきくさが波なみのまにまに流轉るてんして取り止とどまる處ところがないと同様どうやうに、つまらなく人生せいを終はらねばならぬであらう。然しかるに何かしらシツカリした中心ちゅうしんとなるべきものを持つて居ゐるならば、如何いかなる事件じけんにぶつかつても、適當てきたうに切り抜ぬける事ことが出来る。

人間にんげんも四十位くらゐになると一通りの見識けんしきと云ふものが出来るやうにはなる。

けれどもそれは要えうするに一つの固執こしやうに過ぎないから、融通無碍ゆうづうむげ、變通自在へんづうじざいと云ふ譯わけには行ゆかない。

之これに反はんして信仰體驗しんかうたいけんは理窟りくつを超越てうえつしたもので、云いはゞ研とぎすました鏡かざみを持つて居ゐるやうなものであるから、其鏡そのかざみに寫うつされた本當ほんたうの正態しやうたいを見届みとることが出来る。此故このゆゑに頑固こんこな突張つっぱりもなく、正ただしい處理しゆりもわだかまらずに出来るのである。

何いづれにせよ、大きな問題もんだいは信仰しんかうに依よつて生命せいめいの謎なぞが解決かいけつすることである。そしてまた是これが一番ばんうれしいことである。法然上人はふねんしやうにんも「死生共ししやうともに煩わづらひなし」と云いはれて居ゐられる。私達わしたちは此この一枚起請文まいきしやうもんの法然上人はふねんしやうにんの御言葉おことばを其儘素直そのなまに味あぢつて念佛ねんぶつの信仰しんかうに精進しやうじんしやうではないか。

古人こじんが大苦心だいくしん大努力だいどりよくを以もつて荆棘けいきよくを開拓かいたくして呉くれた道みちを進すすむのは決して卑窟ひくつではなく寧ろ非常ひじやうな利益りえきである。

告 豫 號 次

前代の八が作つた文化だからと云つて、之れを捨て、電燈を止めたり、鐵道をやめたりすることの愚なる事は、云ふ迄もない。

信仰への捷徑。

それは此一枚起請文に依て始めて、今更新らしく私達の胸の中に發見せられるものである。

此故に絶好なる信仰の水先案内こそ此一枚起請文である。

すばらしい一枚起請文！

一休禪師が此一枚起請文を見て「法然活如來」と尊敬せられたのも無理はないと思ふ。(完)

各方面から非常な賞讃を博した一枚起請文は終結した。本誌は更に請ふて次號から、

『阿彌陀經講義』(全六回)

を書いて頂くことになつた。從來の型を破つてスツカリ阿彌陀經を解剖し、信仰の極致を讀者の前に提唱する筈である。乞ふ刮目して待たれんことを。

編輯後記

▽戸外に訪れた濃い秋色を窓越しに眺め乍ら、編輯を終えて上気した顔をひんやりとした風に撫でられながら、ホツとした氣持です。

▽本號から子供欄を作りました理想的なものを作り度いと思ひながら、目的からは未だ遠いと云ふ感じですが。然し、マンガも挿繪も一流人の手を患はした立派なものであります。

▽佐藤春夫氏の『黒谷法然上人傳』、中村辨康師の『一枚起請文講義』いづれも讀者、及び各方面の絶讃の中に、本號を以て終結いたしました。來月よりそれに代るすばらしいものを兩氏にお願いしてありますから、御期待下さい。▽宇野浩二氏の『旅路の芭蕉』は著者の止を得ない理由から、今

月は休載いたしました。が、來月は必ず力作をのせると云ふお約束です。

▽戯曲『去來の梅』の作者、北林余志子氏は新進の閨秀作家。

『牛を食ふ』その他多數の上演戯曲があります。

▽『淨土に往生するとは』の桑田寛隨師は京都百萬遍知恩寺法

主、得難い讀物であります。佐藤賢順氏は、新進哲學者として教界の一異彩であります。

眞野正順氏に就いては既に多言を要せず。

▽活動の秋、明朗な秋を己れにも讀者諸賢にも期待し、淨土の一層の躍進のためにふるひ立ちませう。

『信仰體驗談』を募集します。

苦境に立つた時、私達の魂に呼びかけるもの——どんな底の闇みにあへいである時、私達の行衛に一條の光明を齎すもの——失意の人に勇氣と信念を與へ、再起に振ひ立てるもの——惑亂と懊惱の渦中に安心の境地を齎すもの——生活の波濤の中で燈臺の如く我等の行衛を指し示すもの、それが信仰である。その一つ一つを取り上げて見やうではありませんか。元來それは貴方お一人だけが藏つておくべきものではないのだから。

- なるべく四百字詰原稿紙六枚以内。
- 貴方自身の體驗になるものとは限らないが、可成今生きてゐる事實を具體的に書下さい。
- 毎月七日迄に到着したものの中から選んで、翌月號の紙上に發表します。
- 原稿の取捨は編輯部に御一任下さい。
- 封筒の裏に『信仰體驗談』と朱書して下さい。
- 掲載の分には謝辭を呈します。

淨土 十月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和十年九月三十日印刷納本
昭和十年十月一日發行

(定價金十錢)

品川區南品川四丁目三七八
編輯兼 佐藤 賢順
發行人

東京市本所區千歲町二ノ一八
印刷人 赤尾 光雄

東京市牛込區市ヶ谷加賀町一ノ三
印刷所 大日本印刷株式會社

發行所 法然上人續仰會

東京市芝區芝公園明照會館内
振替東京八二一八七番

『淨土』購讀規定

一部 定價 金十錢
(送料一錢)

一ケ年 金一圓
(送料不要)

右の一ケ年金壹圓は法然上人續仰會の會費です。入會申込みと同時に一圓御納めになれば、『淨土』及び月刊新聞『法然續仰』が一ケ年間購讀できます。その他種々な特典が得られます。

中村 辨康 師著 (新刊)

法然上人の信仰生活

四六判一三〇頁
高雅上品な装幀
御影寫眞入
定價三十錢(送料四錢)

法然上人の辿り給ひし信仰の道こそ、われらがしるべなり。

著者の言葉——精魂をつからしめて求めに求めた三十年の求道生活とその當時のあらゆる階級の人達を魅し盡した四十年の信仰生活とが何んなに近代人の胸を突くかを振りかへつて見たと思ふ。

それが形に現はれてゐやうとゐまいと、信仰を求め宗教に憧れるのは人間本來の姿である。古來宗教界の巨人と仰がれる聖者は悉くこの人間本來の姿を最も輝かしく明瞭に示した人間の精神の鏡であり、また萬人の中に潜む信仰心に、迷いの路を與へ、その萌芽に開花の時を與へた慈雨である。故に若しそれ等巨人の信仰生活の内部を覗ふことが出来るなら、我々は日常無意識の中に捨て、省みなかつた生活の瓦礫の中に、突如燦然として輝く向上の珠玉を見出すのに快を恣にし、貧しくも思はれた己れの生活が如何に豊富な内容に充されてゐるかを再發見して驚嘆を禁じ得まい。

法然上人の巨大にして無双なる求道生活、信仰生活の迹を慕ひ、その法悦にひたらんとするも時に現代生活の汚濁を洗ひ清め清淨なる人間本來の姿に立返らんがために外ならぬ。

發行所

法然上人鑽仰會

之ぞ斷然優秀の

消炎鎮痛貼布藥

- 一、皮膚に貼つたまゝ入浴差支へなし
- 一、貼り換へず共一晝夜藥効を持続す
- 一、綺麗故不快の貼りアトを残さず
- 一、藥臭もなく悪性のかぶれも起さず
- 一、何れへ貼つても柔軟伸縮自由自在
- 一、ロートエキスを含む最新の威力



佳人の膏藥

ママプラスター

愛讀者御優待

御住所氏名明記の上大木合名會社宛御
申込下されば本誌讀者に限り見本贈呈

適應症

神經痛 肩の凝
リウマチスの痛む所
運動に因る筋肉並關節痛
勞働に因る筋肉並關節痛
打撲 捻挫 胸痛
手足首背腰の痛む所
乳腺炎 齒痛 靴擦
疝氣 腫物 蚊傷



大木合名會社

東京市神田區鍛冶町三
電話 神田代表 壹壹〇番五

各藥店にあり
二十錢
二十五錢
一圓

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可(毎月一回一日發行)
昭和十年九月廿日印刷納本
昭和十年十月一日發行

淨土 第一卷 第六號

定價金十錢(送料一錢)